

ISSN 0914-8671

# 農村計画

NO.52  
第33卷  
1号  
2004.8

農業土木学会農村計画研究部会



# 農 村 計 画 第 52 号

## 目 次

足下の青い鳥 .....	有田 博之.....	1
報 告		
1. 人と地域の宝を活かした最後の生き残りの道 ～岐阜県清見村の事例～ .....	松葉 晴彦.....	3
2. 地域資源に女性パワーを活かして ～明宝レディースによる地域特産品づくり～ .....	本川 栄子.....	10
3. 山里の知恵を伝える～荒城農業小学校～ .....	牛丸 博和.....	14
4. 古きをつなぎ、若者の居着く山里づくり .....	下梶 勝彦.....	17
5. 山里の語り部 .....	中屋栄一郎.....	20
6. 農村整備をめぐる情勢報告 .....	山田 和広.....	23
若手奨励賞受賞講演のプレゼンテーション資料 .....		27
平成15年度農村計画研修会		
－第25回農村計画研究会現地研修集会－について .....		46
事務局通信 .....		48
刊行物案内 .....		51
編集後記 .....		52

(表紙写真) 高山市滝町の棚田：海拔790mを超えた場所にある滝町の棚田は、農家の高齢化と傾斜地の重労働により耕作放棄が続いていましたが、地域では棚田を再生しようと平成13年に「滝町棚田保存会」を結成し、活動を続けています。

(裏表紙写真) 上記棚田での農業体験：「滝町棚田保存会」の活動の一つで、市内の小学生らの農業体験を実施しています。滝町の棚田の美しい景観や伝統的な農業を守ることの大切さを知ってもらうことが目的です。

平成16年度農村計画研修会  
—第26回農村計画研究部会現地研修集会—

主 催：農業土木学会農村計画研究部会  
後 援：岐阜県，水土里ネットぎふ  
（岐阜県土地改良事業団体連合会）  
協 賛：農村計画学会

1. テーマ

みんなで描く山里ものがたり  
～古きをたずね，人と地域資源でつむぐ～

2. 日程

平成16年 8月26日(木) 研修集会  
8月27日(金) 飛騨高山現地検討会

3. 会場

飛騨・世界生活文化センター 芸術堂  
（岐阜県高山市千島町900-1 TEL 0577-37-6111）

4. プログラム

- (1) 研修集会および講演会 平成16年 8月26日（木）9：30～17：00
- 9：00～ 9：30 受付
- 9：30～ 9：45 開会挨拶
- 9：45～11：15 講演「人と地域の宝を活かした最後の生き残りの道」  
～岐阜県清見村の事例～  
清見村助役 松葉 晴彦 氏
- 11：15～12：00 講演「地域資源に女性パワーを活かして」  
～明宝レディースによる地域特産品づくり～  
明宝レディース社長 本川 栄子 氏
- 12：00～13：00 休憩
- 13：00～13：30 事例報告「山里の知恵を伝える ～荒城農業小学校～」  
国府町新産業振興課長 牛丸 博和 氏
- 13：30～14：00 事例報告「古きをつなぎ，若者の居着く山里づくり」  
山野村夢づくりの会 下梶 勝彦 氏
- 14：00～14：30 事例報告「山里の語り部」  
滝町棚田保存会 中屋栄一郎 氏
- 14：30～14：50 情勢報告 農林水産省農村振興局農村整備課課長補佐 山田 和広 氏
- 14：50～15：05 休憩

15:05～16:45 オープンディスカッション (100分)

コーディネーター	岐阜大学教授	松本 康夫 氏
パネリスト	清見村助役	松葉 晴彦 氏
	明宝レディース	本川 栄子 氏
	国府町新産業振興課	牛丸 博和 氏
	山野村夢づくりの会	下梶 勝彦 氏
	滝町棚田保存会	中屋栄一郎 氏

16:45～17:00 閉会挨拶

(2) 飛驒高山現地検討会 平成16年8月27日(金) 8:30～15:00

8:15～ 8:30 受付(高山駅前)

8:30～ 高山駅前出発

清見村(パスカル清見)

高山市(飛驒の里)ほか

～15:00 解散(高山駅前)

(注) 本研修会は、農業土木技術者継続教育プログラムです。(教育分野B9, CPD10)

農業土木学会農村計画研究部会ホームページのご案内

当研究部会のホームページでは、部会の行事案内等の最新情報を提供しております。農業土木学会のホームページからもリンクしておりますので、インターネットブラウザをお持ちの方は、ぜひご利用下さい。

アドレスは、<http://www.jsidre.or.jp/bukai/keikaku/bukaitop.htm>です。

## 足下の青い鳥

本年度は岐阜県高山市に於いて第26回現地研修集会を開催することができました。本研修集会を受け入れていただいた岐阜県、水土里ネット岐阜をはじめ、現地見学等でご支援いただきます市町村等の関係者ならびに東海農政局の方々にお礼申し上げますとともに、本集会の開催を皆様と共に喜びたいと存じます。

農村計画研究部会の現地研修集会は、計画課題への先進的な取り組みを、技術者・研究者が共に学び、検討することによって、現場の課題解決へ繋げようとの趣旨のもとで開催してきました。農業・農村整備の枠組みが変化し、住民要求も従来とは大きく変わっているなかで、こうした本集会の役割は重要性を増していると考えています。今回のテーマ、「みんなで描く山里ものがたりー古きをたずね、人と地域資源でつむぐー」は、松本康夫・岐阜大学教授を中心とした方々に企画頂いたものですが、大変時宜を得たものとなったことにお礼申し上げます。

第二次大戦後、私達日本人は欧米のとりわけ物質文明に追いつき追い越すことを求めてひたすら努力を続けてきました。その甲斐あってか、経済面では遜色のないレベルにまで至ったのですが、私達の心の中にとらえ所のない喪失感が広がっているのは皮肉なことです。こうしたなかで、上ばかりを見つめ、欧米的、都市的で新しいものを善とする一方で、伝統的、農村的、地域的なものを低位なものとしてさまよってきた私達の心の中に、足下を見つめ直そうという機運が広がっています。こうした心情は、農村に対する見方、行動様式にも変化を与え始めています。誰にとっても故郷は忘れがたいものですが、その記憶は山や海などだけでなく、何より祖先から受け継ぎ、生き続けた証としての土地の利用、遺物、お国言葉、風習、建造物、郷土料理などが私達に与えてくれるものの全体に亘ります。私達が対象とする農業・農村のおかれている状況は決して楽観的なものではありませんが、身近であるが故に顧みられることの無かった、こうした祖先からの贈り物である足下の「青い鳥」をいかに見つめ直すかが、今後の日本人の価値観やライフスタイル、ひいては地域社会のあり方に大きな影響を及ぼしていくものと思われま。

私達は、時代の流れの中で、今後の農業・農村の方向付けを見誤らず、確かなものとしていくことが強く求められています。岐阜県での取り組みを知り、現地を見ることによって、今日の農業・農村整備について多くの議論が触発され、更に新たな模索の契機となることを祈念して、挨拶とします。

2004年 8月

農業土木学会  
農村計画研究部会長  
有田 博之

## 講演者の略歴（講演順）

### ■松葉 晴彦（まつば はるひこ）

- 昭和22年 高山市に生まれる  
昭和42年 岐阜県農業講習所（大学校）卒業  
岐阜県庁入庁 岐阜県農業改良普及員  
平成3年 清見村農林商工課長 兼(財)ふるさと清見  
21事務局長就任  
平成14年 清見村助役 兼(財)ふるさと清見21理事兼  
事務局長  
全国初の道の駅「パスカル清見」の運営に  
手腕を発揮

### ■本川 栄子（もとかわ えいこ）

- 昭和50年 明宝村内の仲間と料理勉強会などの活動を  
開始  
平成4年 明宝村内の農業婦人グループとともに株式  
会社明宝レディースを設立  
平成5年 同社代表取締役社長に就任、現在に至る  
平成15年 総理大臣官邸にて、政府主催「地域産業お  
こしに燃える人の会」33人の一人に選定さ  
れる

### ■牛丸 博和（うしまる ひろかず）

- 昭和26年 岐阜県吉城郡国府町に生まれる  
昭和45年 国府町役場  
建設課・産業課・総務課・税務課・企画課・  
農林課・町民課を経て現在、新産業振興課  
長  
この間、土地改良・営農組織の育成に従事  
平成14年 荒城農業小学校に関わる

### ■下梶 勝彦（したかじ かつひこ）

- 昭和26年 岐阜県吉城郡神岡町に生まれる  
昭和42年 岐阜県農業講習所卒業  
山之村農協へ入組  
平成13年 「山野村夢づくりの会」を立ち上げ  
現在、同会代表、JAひだ袖川支店営農生活  
課長  
夢づくりの会をはじめとして、地域起こし  
に奔走する

### ■中屋 栄一郎（なかや えいいちろう）

- 昭和23年 高山市滝町に生まれる  
昭和41年 岐阜県緑化促進青年隊卒業後農業に従事  
平成6年 国営農地開発滝団地に入植  
農業・炭焼き・マタギの技術、地域文化の  
伝承に努める  
滝覚坊（ろうかくぼう）史跡保存会会長、  
滝町棚田保存会副会長、ふるさと水と土指  
導員

### ■山田 和広（やまだ かずひろ）

- 昭和63年 京都大学農学部卒業  
農林水産省入省  
平成14年 農林水産省企画評価課課長補佐  
平成16年 農林水産省農村整備課課長補佐

## コーディネーター略歴

### ■松本 康夫（まつもと やすお）

- 昭和25年 岡山県に生まれる  
昭和47年 京都大学農学部農業工学科卒業  
昭和49年 京都大学農学研究科修士課程修了後  
岐阜大学農学部助手、講師、助教授を経て  
平成5年 岐阜大学農学部教授、現在に至る  
(著作)  
「土地利用計画と市町村条例—地方分権時代へ向けて  
の農村計画—」, 「農村計画学」他

# 人と地域の宝を活かした最後の生き残りの道

～岐阜県清見村の事例～

松葉 晴彦（清見村助役）

## 1. 地域資源を生かした村づくり

### (1) 清見村の概況

清見村は、高山市の西に隣接し、高山駅から車で15分ほどの位置にあり、総面積359.2km<sup>2</sup>の広い村に2,650人の住民が暮らす山村です。

昭和30年（1955年）には4,753人であった人口は、昭和55年（1980年）には2,351人まで減少し過疎化の傾向にありましたが、現在では微増の動きを示しています。しかしながら、地域によっては高齢化と過疎化の進行が進み、集落の機能が停滞する恐れのあるところも発生してきました。

これだけ広い村ですが、「ありそうで、ないものが5つある（スキー場、ゴルフ場、駅、ダム、温泉）」というように、これといった特徴はありませんが、飛騨牛とトマト、ほうれん草などによる農業基盤の確立により活力を維持し、出稼ぎのない村でもありました。農業生産の維持による農村風景と周囲の森林風景の維持を図り、その利活用に努めるところであります。

### (2) 飛騨せせらぎ街道（写真1）

この村を全国的に有名にしたのは、「飛騨せせらぎ街道」沿道の自然景観保全を手始めとする、都市・山村交流活動をからめた過疎対策・地域振興への取り組みの成功でした。

清見村のほぼ中央を南北に縦断する主要地方道高山八幡線・国道257号線（「飛騨せせらぎ街道」）は、岐阜市への最短ルートで、産業・生活道路としても重要な道路ですが、沿道の開発は進んでおらず、そのため天然林が多

く残るなど、自然景観が優れていました。

昭和60年、このすばらしい景観を保全しようという村長の提案の下、役場職員が中心となり地域ぐるみの沿道下刈り作業が始まりました。翌昭和61年には「清見村沿道自然景観保全条例」が制定され、下刈り作業も昭和62年以降、役場職員、村議、集落住民、老人会、商工会などの参加による「沿道森林修景奉仕作業」として定着しました。こうして、外部資本による乱開発を防止し、自然景観を保全することができたことにより、春の新緑や秋の紅葉の時期には県内・県外から多くの人が訪れるなど、交流人口の拡大が進みました。

### (3) パスカル清見（写真2）

このせせらぎ街道の沿道にある集落に大原地区がありますが、林業の低迷と激しい過疎化を前に、さびれていく集落でありました。この集落を維持していくにはどうしたらよいか議論するなかで、新たな雇用の場をつくり、Uターン者を受け入れるための施設を整備する必要性の認識が高まりました。そして、手つかずのまま残された自然を活用し、都市生活者との交流を主体とした地域活性化を進めるために「パスカル清見」を整備する案が生まれました。これは、ホテル、レストラン、体験農園等からなる観光・交流施設であり、平成元年に農業農村活性化農業構造改善モデル事業と農村基盤総合整備を受けてその建設が実現しました。

「パスカル清見」は一見するとドライブインですが、背後にはホテル、オートキャンプ場、果樹園、農園もあり、全体として、さながら小さなテーマパークとってよいでしょう。



せせらぎ街道(1)



カタクリの群生



せせらぎ街道(2)



三日町のラベンダー園



せせらぎ街道(3)



大倉滝

写真1 せせらぎ街道

地域ぐるみで沿道の下草刈り作業をする等自然景観を保全しています。

原生林が残り新緑、紅葉、雪景色と四季を問わず美しい街道です。カタクリやラベンダーは、訪れる人の心を和ませます。





施設遠景



ホテル パスカル

写真2 パスカル清見

特産品の売店、レストラン、ホテル、体験農場、体験施設、オートキャンプ場などをもつ総合施設。道の駅を併設しています。



写真3 花餅作り

花餅とは、飛騨地方のお正月を彩るため、紅白の餅の飾りです。体験館では田舎名人の指導のもと、豆腐作りや花餅作り、木工加工等の体験ができます。

#### (4) 様々な交流拠点施設

また、村内には、民間の施設として、全国的に知名度の高い緑の工芸村「オーク・ヴィレッジ」、木工職人を養成する「たくみ塾」があります。また、村営施設として、プラネタリウム（「飛騨プラネタリウム」）などの見学施設、旧学校施設を改良した「ふるさと学校」や「やまびこの家」などの宿泊研修施設、そしていくつかのキャンプ場などがあり、これらの施設とその地域の人材等の地域資源を生かしたさまざまな体験イベント（どんぐり拾いから枝打ち体験・植樹等森林作業体験、かまくら作り、田舎名人が指導する餅つき・豆腐づくり・花瓶作り等の農村体験）が企画実践され関西や中京圏から来訪が多くあります（写真3）。

広く、人口の少ない村内で交流拠点施設を増やすことは、決して容易なことではありませんが、新しい動きはすでに始まっており、せせらぎ街道で培った交流事業から、現在建設中の高規格二道（東海北陸自動車道・中部縦貫自動車道）のI.Cの建設に伴い、隣接する高山市を中心とした交通量の飛躍的な増加を利用して、清見村ならではの体験を目指しています。

現在、大倉の滝周辺地域では「森林公園おおくら滝」の開設により、遊歩道の散策により四季の移り変わりを提供しています（写真4）。

これまでの交流施設は、それぞれが独自の内容と組織で交流事業を推進してきましたが、今後の交流人口の拡大を見込み、村内にある既存の施設や組織がもつインス



写真4 森林公園おおくら滝

遊歩道の散策により四季の移り変わりを楽しめます。

トラクターや交流のノウハウ、施設等を有機的に連携するための「ひだきよみ自然館」を平成14年春に開設し、この施設を交流の拠点として村内の自然景観を大切に保存しながら、一層の交流事業の推進を図っていきます。

## 2. パスカル清見の経営体制

### 一財団法人ふるさと清見21ー

「パスカル清見」、「農産加工センター」(写真5, 6)などを経営する財団法人「ふるさと清見21」は、自治体が主体となって経営する財団でありながら黒字経営を行い、毎年4千万円ずつ村に寄付しています。その組織体制は図1の通りです。



写真5 農産加工センター  
トマトや飛騨牛といった豊富な地域の食材を使って、人気製品を生みだしています。中でもドレッシングは都会のスーパーからも引き合いがあります。

## 3. 人を活かす方法について (松本大学での講演記録より)

交流施設を整備し、そのための組織をつくっても。その中で働く人を活かさないことには、むらづくりはできません。そこで次に、私の経験から、人を活かす方法について述べます。

### (1) スタートは「言わない3原則」

「職場の空気」を変えるための「言わない3原則」を紹介します。職場の中を1週間か10日で見事に変える方法があります。どこの職場でも朝礼を行います。朝礼の時は、その組織の長が一言しゃべって、その後順番で女性職員が伝達事項を行い、それで終わる。これではダメです。まず、毎朝大きい声で「言わない3原則」の唱和を行います。「1. 極力人の悪を言わない」、「2. 極力過去の事は言わない」、「3. 極力『できない』と言わない」これを3回4回唱和させます。はじめは声が小さいが、2日目3日目になってくると大声でできるようになってきます。みんなが交代でリーダーになり、「極力人の悪を言わない」、「極力過去の事は言わない」、「できないと言わない」を毎朝繰り返します。

「おいすまんけどな、このくらの仕事今日とは言わんから、明日中に頼むぞ。」

「そんなこと言われたってそんなどうもこうもできん……。」



パスカル ドレッシング

トマトジュース、ケチャップ

飛騨牛加工品

写真6 農産加工センター製造品

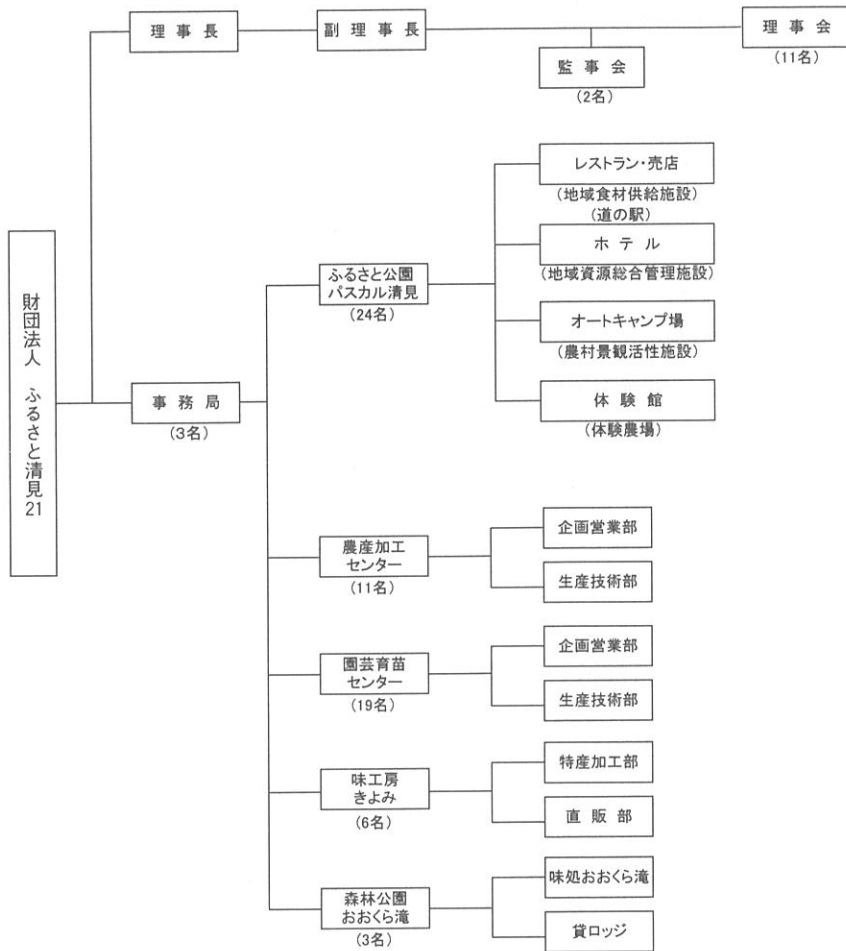


図1 財団法人ふるさと清見21組織図（平成15年4月1日現在）

1週間10日経つと「あの……ん……頑張ります」とこうなります。実践したことが無い方にはわからないでしょう。グダグダ人の悪口やら、「わしの若いころはあじゃこじゃ」と言いますが、1週間10日経つと「あなたみっともないね、毎朝みんなで唱和しているでしょう、恥ずかしいね」、「あぁごめんごめん」とこうなります。その職場の中の雰囲気、どちらかというと他人行儀になります。職場というのは、戦いの場です。遊びの場ではありません。ベチャベチャと私語をしゃべるのは、家に帰ってからすればよいのです。

## (2) 行動・印象の4原則

もうひとつは、行動・印象の4原則です。例えば自分が知らない旅先で、「すみません、松本へ行く道はこっちの道でいいですかね？」こういうふうには聞くとします。「あっ、良い良い、この道が良い」。すると答えた人がもう良い人に見えます。そして、その人も含めその周辺地域全体の人柄が良い農村地帯のように思えます。「すみません、長野へ行くにはどう行ったら……」。「はあ？ あっちゃ、よう分からんがあっちじゃ」と答えたとして。その人のレベルが分かりますが、その地域全体がそういうレベルのような気がしてしまいます。そういう経験ってありませんか。だから職場だとか地域を本当に良くす

るためには、地域全体の教育、レベルアップが大切だと思います。清見村の小中学校は日本一あいさつが立派だと思っています。どんな人でもとても大きい声で挨拶します。「おはようございます、おはようございます」と。今は伝統になっています。

行動・印象の4原則は「1. 挨拶がしっかりできること」、「2. 返事ができること」、「3. 機敏性」、「4. 笑顔」です。初対面に笑顔は大切です。いま述べた行動・印象4原則は、小学校時代に教えてもらうようなことです。しかし、皆さん歳を重ねるほど基本的な挨拶や返事や、キビキビすることを忘れていきます。

役場の女性職員に次のようによく言います。

「いくらパソコンができる、あれができる、これができるなんて言うよりも、役場は最大のサービス業だ。税金もらっている。挨拶ができて返事がシャツとして『わかりました』『すみません』、そしてニコツとしている。これが大切や。ツーンとして返事もしない奴のほうがタワケに見える。そしてそのことによって村全体がつぶされる。村のイメージダウンだ。」

グリーンツーリズムでいえば、施設の担当職員がしっかり仕事をするのは当たり前ですが、近くの地域住民も、なにか聞かれたとき、飛驒弁、清見弁丸出しでもいい、本当に誠意を持って答えてあげる。わからない時には、「わしゃ分からんので、その事についてはちょっと待ってりゃあ」といって誰かに聞いてくる。相手はそれだけで感謝します。これが、本当の郷土愛、村を愛するということだと思います。

### (3) 3-4-3の組織人価値評価

「組織人価値評価3-4-3」は、自分の哲学です。10人いると3割はそれなりに優秀な者で、4割は並の者で、下の3割は出来損ないです。上位の3割バッターが稼いでくれ、下の3割が食いつぶす構造です。

一番上の3割は「人財」です。「ざい」の字は木ヘンではなく、貝ヘンで書きます。真ん中の4割は「人在」です。「在宅」の「在」で、「いるだけ」という意味です。下の3割は「人罪」で、「罪人」です。

問題はここからです。長年のカンで言うとうこうなります。1番下の3割をクビにするとどうなるのか。1年後2年後には上から落ちてきます。また3-4-3になります。間違いありません。役に立たない者をクビにすることは簡単です。しかし、1年経つとまたそういうグループ分け、つまり「3-4-3」になります。上位の3割は研修に出さなくても良いと考えます。トップクラスは、自分で勉強します。自分で様々なネットワークを持っており、勉強しています。ボーナスを多めに支給すれば今以上に勉強もするし、新しい情報、ためになるネタも人的ネットワークの中でしっかりと収集してきます。しかし、一番重要なことは中間の4割をどうするかです。これは徹底して教育・研修に出し、課題を与えることです。

静岡に管理者養成学校、TV等で地獄の特訓学校として放映され有名になったところがありますが、そこへは毎年中間の人間を研修に出しています。7日間で一人18万円費用がかかります。よく高山の商工関係者から「おまえのところの財団職員のレベルは高い。良く教育されているし、良く出来る」と言われる。まあ、上の3割は当然だと思っていますが、真ん中の4割が下の3割を引き上げているだけです。1番下の者は、去っていく者は放っておきます。しかし、あえてクビにする必要はありません。また、研修に出す必要もありません。真ん中の4割を徹底的に教育・研修します。このレベルアップが組織全体の中では重要なことだと思います。

### (4) 1日1筆の重要性

私は25年～30年間、1日1筆を実践しています。これは、1日1枚礼状を書くことです。簡単に思えますが、長々書こうと思うと続きません。とても忙しい人と思われた愛知県知事や静岡県掛川市長、大分県日田市長も、「世話になった、松葉君ありがとう」それだけです。しかし、礼状が即来ます。礼状ひとつ来ないような自治体は過疎でどうしようもなく暇な所、貧乏の村ということになります。

財団では営業担当職員を多く抱えています。営業担当には、タイムカードを押さなくてもよいと言ってありますが、本当に仕事をしているかどうかを見分ける簡単な方法があります。「1日1枚、礼状を書く仕事をしな

い、そのコピーを必ずとっておきなさい」と言います。礼状のコピーを見せてもらうと、ちゃんと営業しているかどうか一目でわかります。始終顔合わせいる所に礼状書けば「タワケか」と言われます。午前中パソコンに向かった後、午後からは外回りをして門を叩かないと新規の客は取れません。そして、「ありがとうございました、世話になりました、勉強になりました」と礼状が書けません。1日1枚、365日とは言いません、300日で結構、礼状が書ける仕事をするのが重要です。これを実践するスタッフが一事業所、一会社に20人いると年間6,000人に礼状を書くことになります。10年経つと60,000人になります。その1割が我が清見村のリピーターなりサポーターになってくれたらとんでもない価値になります。考えてばかりでは、なかなか地域、山村は伸びません。まず自分がやることです。大きいことはいりません。小さいことからでもいい、どんなことでもいい、こんなバカなことでも継続することが大事です。

#### (5) 優秀な人間の5原則

最後に、優秀な人間の5原則を述べます。一つ目が情報力。二つ目が企画組立力。三つ目が経営管理力。四つ目が連帯統率力。五番目が技術力です。

1番目の「情報力」の「情報」とはなにかというと、「我が村が、我が財団が、我が地域や住民が儲かること、潤うこと」これだけしか必要ありません。あとの情報はゴミあるいは雑ネタです。遅かれ早かれ新聞にもテレビにもインターネットにも全部載っています。それらに載っていないのは、我が財団、我が清見村の住民が潤うネタや、儲かるネタです。これを集めてくるのが「情報力」です。

2番目が「企画組立力」ですが、いくら知識があっても勉強してもダメです。「知識」は、良いか悪いかの判断材料にすぎません。一方、「知恵」というのは行動を起こす時の判断材料になります。知恵と知識とは大きな違

いがあります。本当の企画組立ができるかどうかというのが、優秀な人間の条件になります。「知識」は専門家に問い合わせれば全部教えてくれます。しかし、それを我が村に、我が地域の中でどのように組立られるかがなかなか難しいのです。コンサルタントに頼むと、時々、日本中どこでも通用するようなコンサルしかしません。町村の名前を変えればどこでも通用するようなものをよく見かけます。組立てこそ命だと思っています。

3番目が「経営管理力」です。数字に弱いものもダメです。常に経費と投資を頭の中に入れておくことがポイントとなります。

4番目が「連帯統率力」です。情報力があって、組立ができ、計数能力も高くても、組織で仕事をする場合、みんなと仲良くすることができない人間はダメです。大事なことは、みんなと仲良くできるが、最後にはキョツと人をまとめられる能力が必要です。

最後、5番目が「技術力」です。自分は田舎技術はそれほど必要ないと思っています。だから、優秀な人材の5原則の一番最後に技術力をもってきました。我が清見村の農産加工センター長も園芸育苗センター長も、経営がうまくいっている所の事業所の長は高校、大学、そして最初に勤めていた企業も農業関係ではありません。農業関係の学校を卒業し、それなりに農業関係の知識と技術をもっていても、組織の中で働いたことがないと問題です。これらを見まちがえて優秀な人材とするととんでもない結果となります。田舎社会の中で会社なり、組織がうまくいっていない原因の1つが、少しくらいの技術を高く評価しているからだと思います。特に、少しくらいの技術があるために「研修には行かず」「質問もせず」そして「勉強もしない」ということが往々にしてあります。何も知らないが、情報を理解し、様々な条件を組立て、計数的に計画を立てる、そして連帯統率力をもって人を動かす、これが今もっとも望まれる農村の中のリーダーだと考えます。

# 地域資源に女性パワーを活かして ～明宝レディースによる地域特産品づくり～

本川 栄子 (明宝レディース代表取締役)

## 1. 女性による会社設立へ

(株式会社 明宝レディースの歩み)

株式会社「明宝レディース」は郡上踊りで有名な郡上市八幡町から、清流吉田川沿いに車で約20分入った郡上市明宝に位置しています<sup>注)</sup>この会社の前身は農村の女性で作るグループ。昭和50年にグループ員で始めた料理勉強会などの活動から始まっています。

昭和52年に夏秋トマトの栽培を開始、郡上地方のきれいな水、朝晩の気温差が大きい気候がトマト栽培にマッチし、周辺の農家を巻き込んで地域の特産品として知られるようになりました。そのトマトの規格外を有効利用するため、昭和58年にトマトケチャップ作りを開始、以後、郷土食「おからもち」や「朴葉すし」の製造販売などさまざまな活動にチャレンジしてきました。

平成4年、「女性だけの会社を作りたい」という当時の

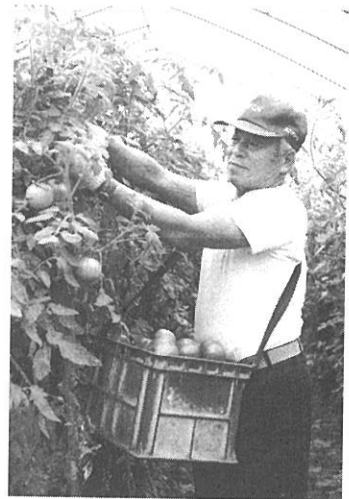
明宝村長の思いから、村内の農業婦人クラブを母体として「株式会社 明宝レディース」が設立されたのです。



明宝レディース社屋



社員一同



明宝トマトケチャップのおいしさは、素材が決め手。地域農家の手で栽培・収穫されます。

注) 平成16年3月の市町村合併により郡上郡明宝村は郡上市明宝となった。

## 2. 地域食材にこだわった商品づくり

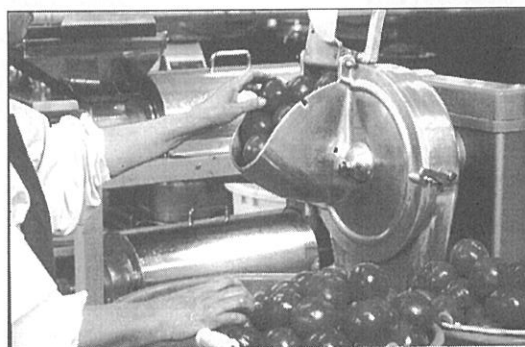
(契約栽培による原材料確保)

郡上市明宝で栽培されるトマトは甘みが特徴の「桃太郎8」が中心です。主要商品となっている「トマトケチャップ」は独特のとりみをつけるため、このトマトを大鍋で約4時間煮込んで作ります。

このほか、きゃらぶき、紅かぶ漬、豆腐などの農産加工品を製造していますが、その原材料の多くは、地域の農家の契約栽培により生産されています。毎年3月には原材料となる種子の配布や、栽培講習会を開催するなど、地域とのコミュニケーションにも努めており、これらの活動が高齢者の生き甲斐や村内の雇用の増加につながり、さらには地域の活性化へとつながっていくことを希望しています。



ここで育った最良のトマトたちは丹念に洗われて、ケチャップになるのを待ちます。



スライサーにかけられた後、おいしさを引き出すためより細かいジュース状にし、鍋に入れられるのを待ちます。



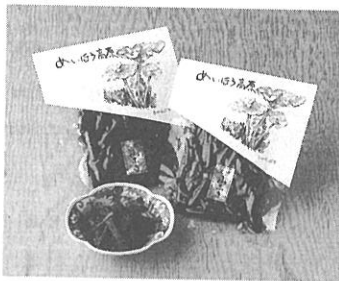
鍋に入れられたトマトたちは、隠し味を入れながら、じっくり煮込まれます。添加物が一切入っていないのも美味しさの秘密です。



じっくり煮込んだら、さアできあがり。ひとつひとつ丹念に瓶詰めされて、みんなのもとへ行くのを楽しみに待ちます。



明宝トマトケチャップ。じっくり煮込んだ手作りの味をご賞味ください。



天然山ふき。ふきはなんといっても葉のまだやわらかい頃のものが一番です。



赤かぶら。赤かぶらをうす塩で自然発酵させ、匂いの味をとうがらしでひきしました。



南蛮煮。葉とうがらしを辛口仕立ての南蛮煮にしました。



ふきのとう。雪の消えやらぬうちから春一番を知らせてくれる、ふきのとうは新鮮なビタミンの宝庫です。



麴南蛮。地元で作った米を使って麴にし、南蛮と合わせました。



梅ぼし。天日干した梅を着色せずに漬け込んだ100%の自然食。

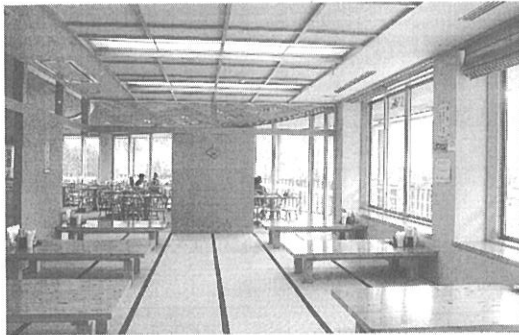
### 3. 販売への取り組み

「明宝レディース」では、これら農産加工品の製造のほか、直営の農家レストランでの食材供給という活動も行っています。

明宝温泉「湯星館」に併設された「ゆうゆう」では、地元の食材をふんだんに使ったヘルシーなメニューを提供しています。また、平成15年には道の駅「磨墨の里」に「おかみさんの店」を出店し、より「おふくろの味」にこだわったメニューを提供しています。

このほか、明宝村デイサービスセンターの昼食及びおやつ提供などの業務も受託しています。製品へのこだわりとその食材を用いた食事の供給が、より一層の販路拡大へとつながっていくと信じています。





明宝温泉湯星館内 うどん・そばの店「ゆうゆう」店内

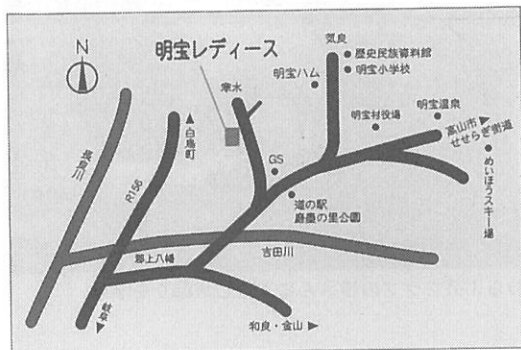
#### 4. これからの取り組み


(やる気・勇気・元気がモットー！)

会社設立当初は、女性ばかりの株式会社ということで、高い注目を受けていました。それに応えるため「明宝レディース」では『味おこしによる村おこしへの貢献』という意識を活動の基本としてきました。

会社であるからには利益を得ることが必要です。その上で地域の産物を積極的に利用することで地域社会に貢献することができれば、こんなにすばらしいことはありません。

今後とも『やる気と勇気と元気があればなんでもできる。』をモットーに、安全・安心な商品の開発を進め、経営の充実を図るほか、野菜の契約栽培についてもさらに拡大し、地域の耕作放棄地の解消を図ることに取り組んでいきたいと考えています。






**MEIHO KETCHUP STORY**

明宝ケチャップ物語

ある晴れた日のことでした、夏の太陽をいっぱいあびた明宝村のトマトが通りかかりの村のおばちゃんたちに言いました。  
 「おいらたちはそのまま食べてもおいしいけど、ケチャップにするともっとおいしいんだよ。」  
 するとおばちゃんかいました。  
 「でもケチャップなんてどう作ればいいの？」  
 トマトはいいました。  
 「鍋さえあればおいしいケチャップになるんだよ。でもね、添加物は入れちゃだめだよ。」  
 それを聞いたおばちゃんたちはさっそく鍋を持ちよっていっしょうけんめい、たんねんにかわいいトマトを煮込みました。  
 するとどうでしょう、トマトの言うとおりそれはそれは溢かき色をした実においしいケチャップになり、村で評判となりました。明宝村の元気なケチャップはどんな料理にもよく合い、健康にもよいとみんなに喜ばれたとさ。



## 山里の知恵を伝える ～荒城農業小学校～

牛丸 博和 (国府町新産業振興課長)

国府町には、各所より石器時代の遺物や多くの古墳群、  
竪穴式住居などが抱負に発見され、住古より人が移住し  
ていたことがわかる。町名の由来は斐陀国府の所在地か  
ら「国府」と名づけられ、国宝・国指定重要文化財・史  
跡等の宝庫であり、「飛驒の古都」、「飛驒歴史文化発祥の  
地」にふさわしく、古代と現代、そして自然と人間がよく  
調和した農村である。

そうした中において、神通川水系の支流荒城川の流域  
の田園を中心とした地域であり、昔から「荒城郷」と呼  
ばれ、昭和39年に村内5小学校が統合し1校になるまで  
「荒城小学校」が存在していた。その跡地を利用し平成14  
年4月「荒城農業小学校」を開校することが出来た。

### 【荒城農業小学校設立の願い】

1. 子供たちの「生きる力」を育むため、農業が教育の  
体験学習に最もふさわしい場として位置づけたい。
2. 子供たちに農業の楽しさや苦勞を学ばせたい。
3. 子供たちに農業を通して、食料に対する感謝の気持  
ちや正しい食習慣を養いたい。
4. 子供たちに豊かな自然や、受け継がれてきた生活習  
慣を通して、里山の文化を継承していきたい。
5. 親子や異年齢の交流を通して、仲間づくりと心の絆  
を深めたい。

### 【沿革】

- ・平成13年度 岐阜県坂下町「柊の湖農業小学校」、長野  
県松本市「桜柿羊の里農業小学校」等を視察させて頂  
き指導を得た。
- ・平成14年4月27日(土) 荒城農業小学校入学式(開校)  
入学生 51名 農家先生 12名

平成14年度開校回数 11回 耕作面積 約30a

・平成15年4月26日(土) 平成15年度入学式

入学生 40名 農家先生 20名

平成15年度開校回数 14回 耕作面積 約70a

・平成15年11月30日 荒城活性化施設完成(荒城農業体  
験交流館)

県営中山間地域農村活性化総合整備事業 本館669㎡  
屋外便 37㎡

その他の整備事業 景観水路・炭焼き小屋・築山・室  
等

全体敷地面積 約8,000㎡

・平成16年4月24日(土) 平成16年度入学式

入学生 91名 農家先生 18名 サポーター 5名

平成16年度開校予定回数 15回 耕作面積 約70a

駐車場・駐輪場・パーゴラ等整備中



わら工芸クラブの皆さんによるしめ飾りを学習

# 荒城農業小学校

## 平成16年度の計画

日 程	内 容
4月24日 (第4土曜日)	入学式・田起こし・種まき・花壇づくり・椎茸菌打ち
5月15日 (第3土曜日)	田植え・種まき・苗植・収穫 (イチゴ, 小松菜)
6月19日 (第3土曜日)	草取り・収穫 (麦, ほうれん草など)・洗心の森登山
7月10日 (第2土曜日)	大麦脱穀・麦茶づくり・収穫 (ジャガイモ)・パンづくり
7月17日 (第3土曜日)	飛騨国府特選館「あじか」で新ジャガ販売体験
7月22日 (第4木曜日)	種まき (そば, 大根など)・稲の穂抜き・夏祭り
8月21日 (第4土曜日)	畦草取り・収穫 (スイカなど)・かかしづくり・川遊び
9月11日 (第2土曜日)	稲刈り・ハサ掛け・収穫 (白菜など)・荒城神社遠足
10月16日 (第3土曜日)	稲脱穀・収穫 (そば, サツマイモなど)・苗植え (イチゴ)
10月17日 (第3日曜日)	飛騨国府特選館「あじか」でサツマイモ, 赤カブ販売
11月6日 (第1土曜日)	収穫 (赤カブ, 白菜など)・洗心の森紅葉狩り
11月27日 (第4土曜日)	収穫 (里芋, 白菜など)・大豆, そば脱穀・炭焼き
12月11日 (第2土曜日)	餅つき・正月飾りづくり
1月15日 (第3土曜日)	豆腐づくり・卒業式
年 間	昔の遊び・木工体験・自然観察・そば打ち体験など

※ 4月～1月まで毎月1～2回の土曜日, 午前9時～午後3時くらいまでの予定です。



「いらっしゃいませ～」の音が響き渡る野菜の販売



昔の稲作体験。足踏み脱穀機や千歯こきで穂を落とす



手作りのパン。発酵させた後、竹に巻き付けて焼く



大きくなったダイコンの収穫



白と紅の餅を使って花餅を作る

## 古きをつなぎ、若者の居着く山里づくり

下梶 勝彦（山野村夢づくりの会）

◎私の住む山野村〈現在は地域の呼び名として「山之村」が使用されている〉

標高850m～1,000mに、伊西、森茂、岩井谷、下之本、瀬戸、和佐府、打保の7集落からなる総面積10,400haの地域となっています。

奥飛騨北アルプスの麓に位置し、11月から4月中旬まで雪が有り生活環境が極めてきびしく、古くは、わらび粉、作馬、鉾山への木炭、戦後は米、材木出しが主でしたが、鉾山の閉山、米の生産調整により農業に見切りを付けて、離村が進行しました。

多くなりました。廃村か、地域を守るかで第二次農業構造改善事業を押し進めた。その中心となったのは、Uターンや卒業後就農した人達です。地元で年間雇用のある場所、人が多く訪れる場所が山野村に必要と行政にお願いし、その結果、本年4月に奥飛騨山之村牧場がオープンされました。今後、地域を創るのは、行政でなく、自分達の力でやるしかないと思っています。山野村で息づいた生活、文化を守り、自然を守り、最大の観光資源は人であり、日々の暮らしの中で山里の暖かさ、やすらぎの場として提供でき、若者が魅力を持って居着く所にしたと仲間達と活動しています。

◎人口から見る変化と時々大きな出来事（飛騨の神岡：町発刊より）

1343年（興国4年） 宗良親王 越中より飛騨入り、信濃に出られる（富山県有峰～山野村～上宝村中尾峠～信濃）

1888年（明治21年）神岡村分村案 79戸 710人

1962年（昭和37年）下之本鉾山閉山 183戸 997人

1974年（昭和49年）大規模林道着工 104戸 396人

1981年（昭和56年）第二次農業構造改善、河川改修事業完成 99戸 343人

1989年（平成元年）

神岡町調査 86戸 306人

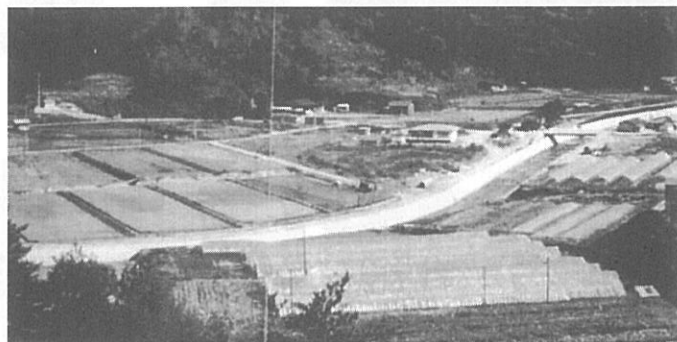
2004年（平成16年）1月末

飛騨市合併 73戸 211人

昔から道路の確保が最大の目標で冬期間自動車の通行が出来る事が夢であり、安心して通行できるようになったのは、昭和55年頃で、わずか23年前です。農業から年中通勤できる仕事に就く人たちが



構造改善着手前



構造改善完成後



奥飛驒山之村牧場

◎山野村は祭りの部

年4回集落のみんなが集まり飲んで語って踊ります。

1月14日 鎮火祭, 5月5日 春祭り, 10月24日 例祭, 11月23日 新嘗祭

お盆には、観音堂でお年寄りも子供もいっしょになって数珠くりを行います。数珠くりが終わるとみんなで盆踊りを行います。

◎地域住民全員がPTA会員で学校行事に参加。

山之村保育園4名, 山之村小学校17名, 山之村中学校3名 (小中併設校)

運動会, スキー大会は住民参加。

◎山野村夢づくりの会が平成13年7月発足, その活動内容。

○みどりの学校

手始めとして, 10家族程度を対象に, 原木の菌打ちをやりました。楽しんでいただけるか心配でしたが, 来たときには退屈そうだった子供さんが, 帰るときにはすごく元気になって, 後でお礼の手紙を頂いたときにはとても嬉しく, 大きな励みになりました。

春 苗代で苗取り→植付 秋 稲刈り→はさ掛け 冬 花もち作り

○交流会

金沢大学, 明治大学, 國學院大学, 早稲田大学の学生さんと会員・住民との交流会です。農家体験, 学校行事への参加, 運動会, スキー大会もやります。



観音堂



数珠くり



盆踊り



みどりの学校



みどりの学校・田植え



花餅づくり



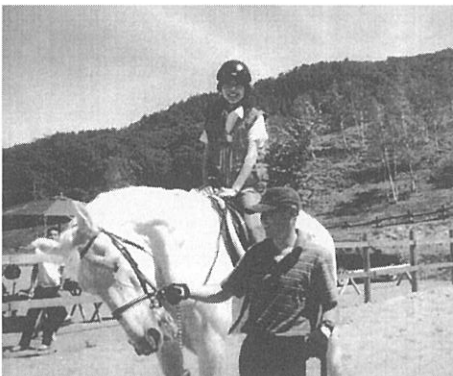
交流会



板倉体験館



山村体験館「しんすけ」



乗馬クラブ

○板蔵民宿の開業（板蔵改装して3～5人宿泊）

簡単に泊まってもらい、地域の人々と交流できるような雰囲気をつくろうと、飛騨特有の板倉を活用した板倉体験館という宿泊施設を平成14年8月にオープンしました。今後、口コミで広がっていったらと考えています。

○山村体験館「しんすけ」

離村農家より民家を買取り、体験館として生まれ変わりました。花もちづくりなどの体験や、20人程度の宿泊もできます。

○16年4月 一家族移住

新しい物の考え方が村に注入されました。乗馬クラブの立ち上げや、テレマークスキーといった新たな取り組みが生まれました。今では大事な村の一員です。

○16年6月 奥飛騨山之村高原乗馬牧場オープン

乗馬クラブの基地。馬6頭常時3名の専任がいます。

○寒干大根体験教室（地元グループと共同）

寒干ダイコンを軒下に吊した情景は、テレビでもよく紹介される山野村の冬の風物誌となっています。地元のものを広めようということで地元グループと共同で取り組んでいます。



寒干ダイコン

## 山里の語り部

中屋 栄一郎 (滝町棚田保存会)

「農村は地域の人がつくるもの。新しいものを持ってこなくても、自分の身近には良いものがたくさんあり、みんな見過ごしているだけ。」

私の宝の里、<sup>たきまち</sup>滝町は高山市街の東、乗鞍さんの主峰「剣ヶ峰」から尾根をたどったところにあります。今でこそ道が整備され、市内までは車で20分そこそこで行けるようになり、市街地は里の生活圏に入っていますが、かつては、里で作ったものを高山へ大八車で曳いて行って、売ったお金で仏具や入学用品を買って帰るといった時代がありました。たぐいもれなく私の里も、昭和40年代には300人いた人たちは、今では250人に減少し、若い人たちは街の豊かさを求め、ライフスタイルが市街中心になるとともに、里の機能は縮小されました。

平成に入って、棚田を見つめ直す機会がありました。あれ放題だった棚田の灌木を起こし、畦を直し、水を引き、かつての棚田がよみがえりました。毎年5月には子供たちと一緒に田植えをし、歓声が上がっています。そして私は、冒頭にあげた「良い物がたくさんあるな」というものを確信したのです。

棚田は宝の一つにすぎません。今日は、みんなが「け

なるがる」ようなお話をしようと思います。

<sup>ごんぼろ</sup>滝町根方地区のよみがえった棚田

乗鞍岳の麓、山々に囲まれ自然豊かな高山市滝町は、中世吉野朝時代に和田氏が流れ住んだと伝わる古い地域で、大楠公学門師滝覚坊<sup>ろうかくぼろ</sup>生誕の地をはじめとして、各所に旧跡や滝町固有の民俗文化が今でも存在します。

近年耕作放棄地がみられるようになったため、平成13年に地元の有志で「滝町棚田保存会」を立ち上げ、棚田の文化的価値や保水機能、生態系保全機能などを調査・研究しながら棚田の保全を実施しています。





現在80枚、約3.5haにおいて水稲、雑穀などを栽培しています。

#### 棚田における農業体験

小さい頃の体験が、将来人づくりに生きてきます。そこで、平成15年5月24日、市内の小学校から募った35人の児童と小学校の先生や保存会のメンバーら約50人により、棚田に田植えをしました。子供たちに田植えや草刈り、稲刈りなど米作りの体験を通じて、美しい棚田の景観や伝統的な農業を守ることの大切さを知ってもらうことが目的です。田植え唄を聴きながら田植えをしました。



棚田における農業体験

#### 棚田かかし村コンクール

「山田のな〜か〜の、一本足のかかし〜」と歌われる童謡の風景を再現し、子供たちに棚田の美しさを知ってもらおうと、保存会で「第1回棚田かかし村コンクール」を企画しました。市内の小学校や県外は埼玉県からも様々な「かかし」36体が寄せられ、棚田の畦道に所狭しと並べられました。渡辺文雄氏（飛騨世界生活文化センター館長）を迎えて審査会が行われました。

#### かべとちょうえん木

かべは古着を巻いて作った蚊取り線香、ちょうえん木はお尻を拭くのに使うトイレットペーパー。昔は大雨の時に川に流すと下流で拾われ、風呂の焚き付けにしました。物を粗末にしない昔からの知恵です。

#### ナメコの栽培

日当たりの悪い田んぼもちゃんと活用。この秋に、ナ

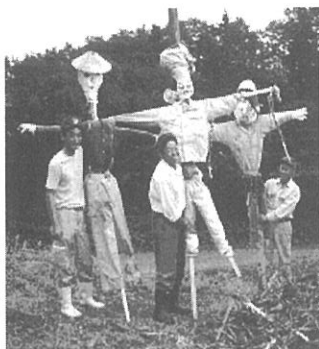
メコを題材に体験学習をやりようと思います。子供たちと一緒に体験に来た奥様方がナメコのぬるぬるをみたときの反応を楽しみにしています。奥様方は、手についたぬるぬるを石けんで落とした後、ハンドクリームを塗るでしょう。このぬるぬるは肌にとっても優しいことも知らず。

#### どじょうぼ豆学校

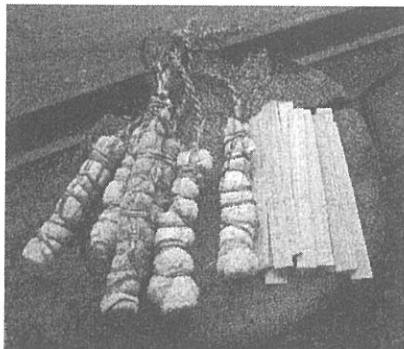
棚田の一角に、子供たちと一緒にどじょうぼを放流しました。最初はおそろおそろドジョウにさわっていましたが、なれてくるうちに田んぼへ放してやることができました。中にはドジョウを持って走る子供もいて、大騒ぎになりました。

#### バッテリー小屋

谷川の水力を利用した石臼で、雑穀を挽きます。杵が「ぼったり、ぼったり」と動きます。小屋の壁に、子供たちが思い思いに自分の気持ちを落書きします。



棚田かかし村コンクール



かべとちょうえん木



養生中のナメコの原木



どじょんぼ豆学校



バッテリー小屋

善九郎のころ

飛驒地方最大の百姓一揆「大原騒動」にまつわる、安永3年12月1日、本郷村善九郎が獄中から妻おかよにおくった遺言状です。善九郎は18歳、おかよは17歳のとき

です。一揆を首謀した農民代表として処刑されました。百姓の心の原点であり、私が農業に取り組むささえとなっています。

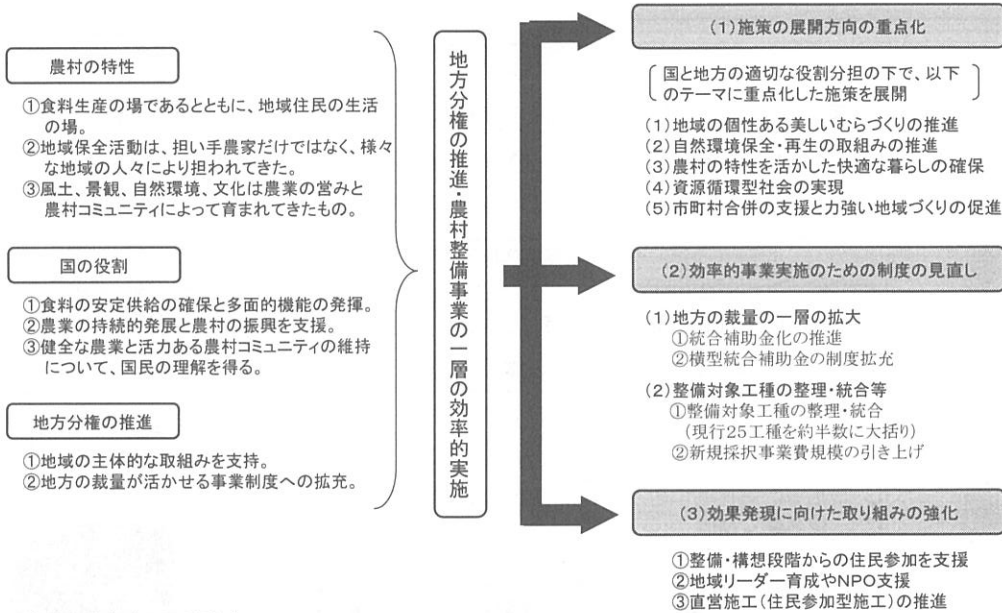
尚々申上候私のともだち  
 え衆中様へも右の趣  
 伝え下さる可く候かしく  
 一書き置申候事承り候へば  
 風便あしく候へば 私にも  
 相はて申候様に聞候間  
 拙者義もかくご  
 いたし申候 其の方にも  
 あきらめ成さるべき 此の世に  
 ては  
 あひ申さず候 然れども一  
 度あい申候へば 残心も  
 御座なく候 此上御両  
 親様 随分々々々々々  
 大切に頼み上げ奉候 扱て  
 其の方にも をふりどのと  
 仲良く相くらし  
 なさるべく候 扱て又随分々々々  
 松之丞様太事に成され  
 下さるべく候、且又御見  
 舞方へ御礼を  
 申さるべく候 此間も鈍  
 見村与十郎殿より柿一わ  
 石神長重郎殿よりは一わ  
 下され候、御礼申さるべく候、  
 此上  
 にも 随分々々の  
 仕合能候て ゑんとを  
 つい方にも合い成り候へば  
 罷帰御目に懸け申す  
 可く候 然しながら 罷かい  
 る事は志ようふ志よう  
 にて御座候へば いとまごい  
 筆入候  
 其の上いとまごいの  
 ため申入度 如此御  
 座候、 以上  
 十二月一日  
 おかよどの  
 善九郎

# 農村整備をめぐる情勢報告

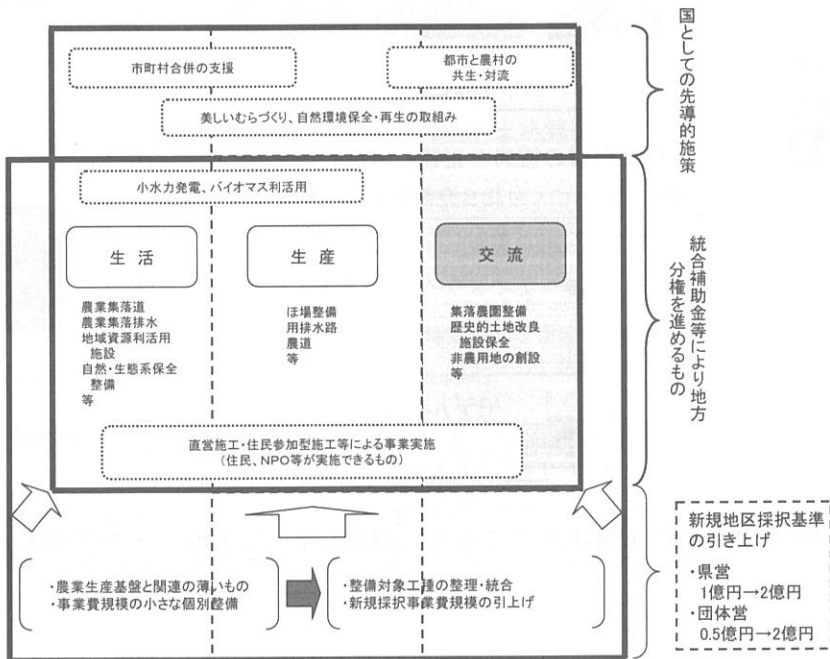
山田 和広（農林水産省農村振興局農村整備課）

農村整備事業の効率的実施に向けた見直し

○基本的考え方



○農村整備事業の展開方向

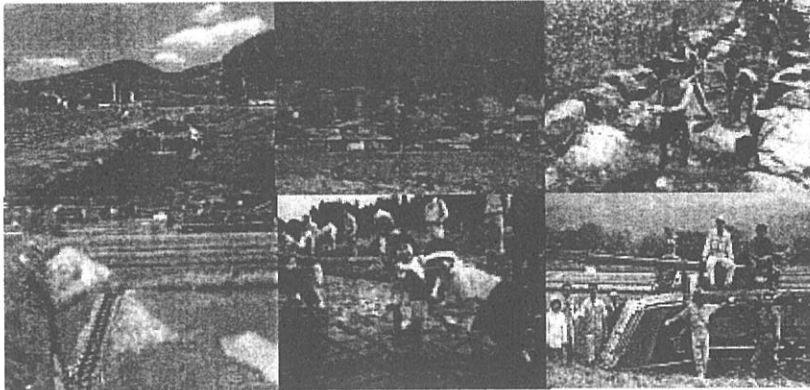


国の先導的施策として「美しいむらづくり」を推進

- 地域住民やNPO等多様な主体の参画による活力ある農業の持続的発展と地域の個性や景観を重視した美しいむらづくりを推進。



# むらづくり交付金



## 事業の趣旨

地域の創造力を活かせるよう、国の関与を縮減し、市町村の裁量を大幅に拡大して、市町村の提案による事業も含めた農業生産基盤と生活環境の総合的な整備を実施します。

## 事業主体

市町村

## 要件

- 「むらづくり計画」の策定が必要です。
- 総事業費 2億円以上

## その他

- むらづくり計画は、当該市町村の「農村振興基本計画」と整合を図って作成します。
- 総事業費の10%以内において、地域の創造力を活かした整備が可能です。(市町村創造型整備)
- 平成17年度までに農村振興総合整備統合補助事業、むらづくり総合整備事業等からの移行が可能です。

## 対象工種

### 1. 農業生産基盤

- ①ほ場整備 ②農業用排水施設整備 ③農道整備 ④農用地開発 ⑤農用地の改良又は保全
- ⑥農用地管理保全

### 2. 農村生活環境整備

- ①農業集落道整備 ②営農飲雑用水施設整備 ③農業集落排水施設整備 ④農業施設等用地整備
- ⑤集落防災安全施設整備 ⑥自然環境・生態系保全施設整備 ⑦地域資源利活用施設整備
- ⑧施設補強整備 ⑨地域農業活動拠点施設 ⑩集落農園整備 ⑪情報基盤施設整備 ⑫施設環境整備
- ⑬歴史的土壌改良施設保全整備 ⑭集落土地基盤整備 ⑮市町村創造型整備

## 「むらづくり交付金」の内容

### むらづくり交付金のポイント

- ①地域の個性を活かした目標・指標の設定
- ②個々の施設の規模等の従来の審査を廃止
  - ・審査内容は、地域住民により地域自らが設定した目標・指標と事業計画との整合性等に限定
  - ・事業完了時には、目標・指標の達成状況を評価・公表
- ③地域の創意工夫を活かした地方提案型の事業内容が可能
- ④ハード整備とソフト活動への支援がセットになった事業内容

#### ○ハード事業による整備



生物の観測が可能な自然型水路



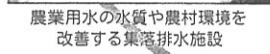
ビオトープなど自然環境への配慮



既存施設を利用した  
農村交流施設



体験学習のための市民農園



農業用水の水質や農村環境を  
改善する集落排水施設



地域資源の循環を図る堆肥化施設

#### ○ソフト事業



地域住民が主体となった計画づくり



都市と農村の共生・対流の促進

## 若手奨励賞受賞講演のプレゼンテーション資料

当部会では2001年度から部会独自に奨励賞を奨励賞を授与しています。本賞は、農業土木学会大会講演会の農村計画部門（第1希望登録者）において、農村計画学の新たな発展に寄与することが期待される研究発表を行った若手に授与されます。

本号では、平成15年度に受賞された以下の2名の方のプレゼンテーション用の資料を掲載いたします。

氏名	所属	テーマ
日比野美香	岐阜大学大学院	ワークショップ方式による農業用水路改修計画の策定プロセス
太田未来	茨城大学大学院	住民の認識・利用管理を考慮した屋敷林の分類及びその特性に関する研究

ワークショップ方式による  
農業用水路改修計画の策定プロセス  
－ 岐阜県丹生川村若林用水路を事例として－

岐阜大学 農村計画学研究室  
○日比野美香 松本康夫

はじめに

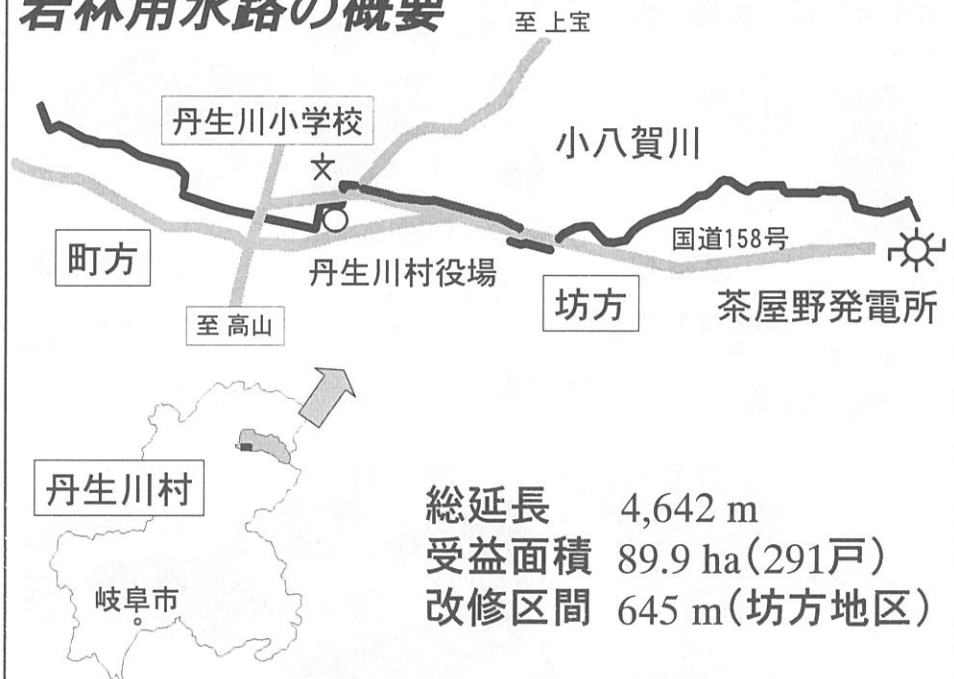
行政主体から住民参加の計画策定へ



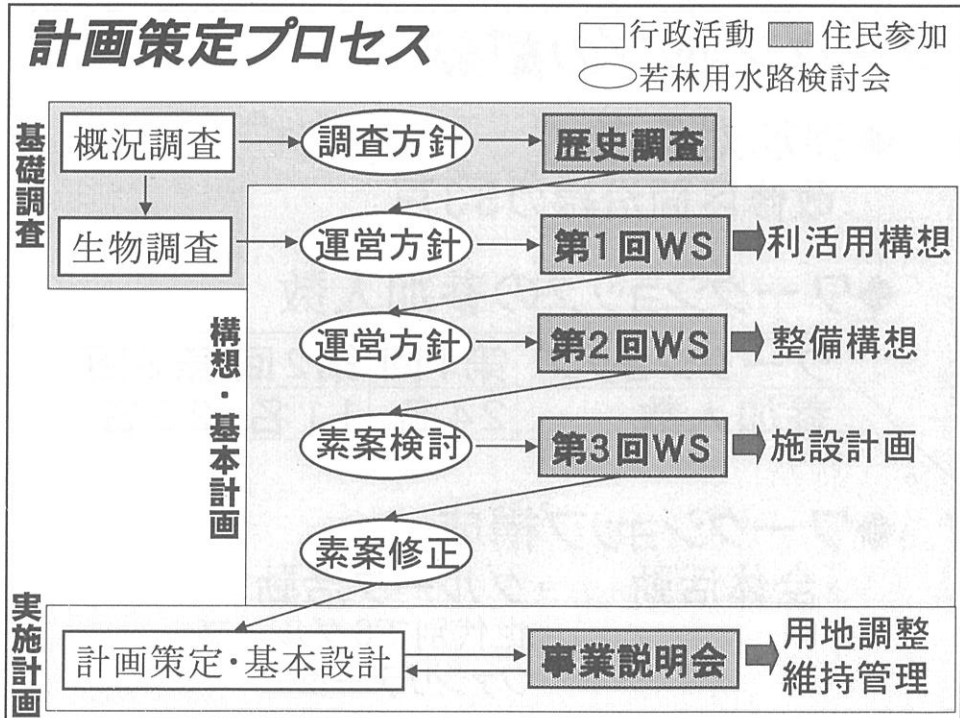
住民参加を策定プロセスに取り込み、  
計画策定手法として活かすことが重要

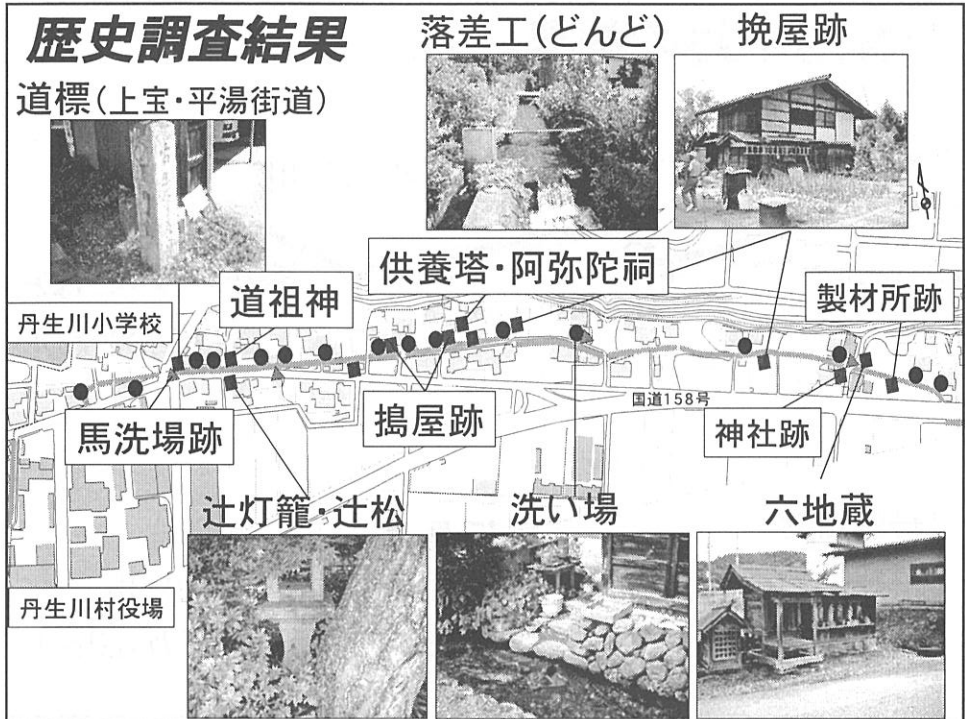


# 若林用水路の概要



# 計画策定プロセス





## ワークショップの概要

◆参加対象者  
改修区間沿線の33戸

◆ワークショップの参加人数

ワークショップ	第1回	第2回	第3回
参加人数	24名	11名	25名

◆ワークショップ構成

- ・全体活動
- ・グループ活動  
世代別で6グループ  
ファシリテーター

# 第1回ワークショップ

## 実施内容

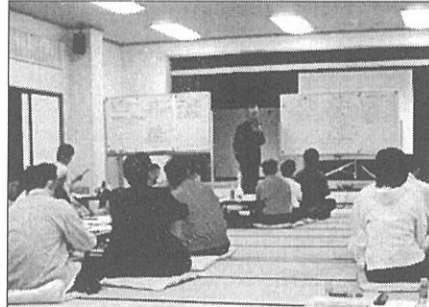
- ①事業概要・WSの説明
- ②景観特性について
- ③現状把握 →
- ④今後の改善方向
- ⑤グループ発表

## 現状把握

- ①歴史探検マップの配布
- ②パネル展示
- ③スライド上映



グループ活動

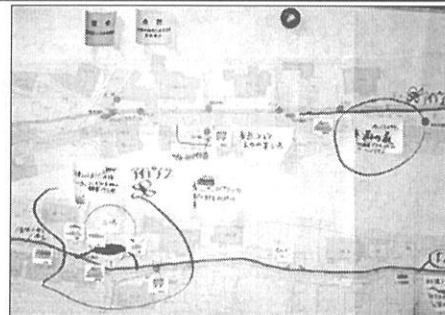


グループ発表(全体活動)

# 第2回ワークショップ

## 実施内容

- ①整備事例の紹介
- ②整備方針の選択
- ③整備構想図の作成
- ④今後の利活用意向
- ⑤グループ発表・意見交換
- ⑥優先順位づけ



整備構想図の作成

項目	内容	備考
1	バス(路線)のあり方	バス(路線)のあり方
2	バス(路線)のあり方	バス(路線)のあり方
3	バス(路線)のあり方	バス(路線)のあり方
4	バス(路線)のあり方	バス(路線)のあり方
5	バス(路線)のあり方	バス(路線)のあり方

全線玉石混交水路 遊歩道の整備  
 いつでも夢を班

今後の利活用意向

# グループ活動結果

## 基本方針の選択

<b>自然</b> 生き物や自然のあふれる 若林用水	<b>歴史</b> 歴史をしのぶ若林用水
<b>遊び</b> みんなが楽しめる、遊べる 若林用水	<b>農業</b> 農業を中心とした 若林用水
<b>生活</b> みんなの憩いの場・ ふれあいの場になる 若林用水	<b>安全</b> みんなにとって安全で 快適な若林用水

1班(20～30代)

①生活

②安全

2班(40～50代)

①生活

②遊び

③農業

3班(60代以上)

①農業

②安全

③生活

## 整備内容投票結果

整備項目	投票結果(班・票数)				項目 合計	
	内容	1班	2班	3班		点数
玉石積み 水路	空石積み	○	○		29	48
	融雪機能			○	8	
	灌漑用水機能の充実			○	6	
	危険箇所の整備			○	5	
管理道 (遊歩道)	舗装道		○		13	24
	平湯街道の全線復元		○		8	
	搦屋～公園の一部	○			3	
広場	親水公園		○		9	19
	児童公園	○			5	
	農業体験		○		4	
	オーナー制の農地		○		1	
搦屋・挽屋	搦屋、挽屋の復元	○			5	8
	水車		○		3	
洗い場	各戸ごと	○			7	7
サイン	説明板(史跡)		○		3	5
	案内板	○			2	
橋	石張り		○		1	1

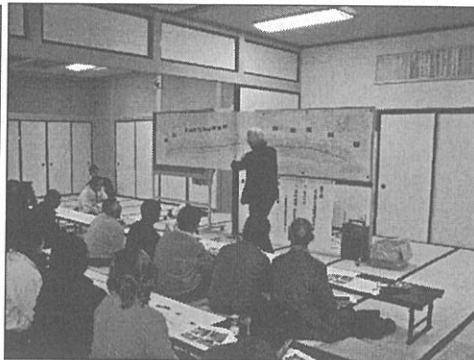
## 第3回ワークショップ

### 実施内容

- ①整備構想, 改修計画案の説明
- ②質疑応答, 意見交換
- ③管理道, 洗い場, 広場について



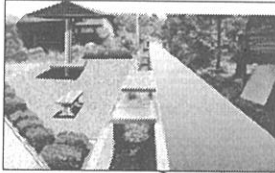
若林用水路検討会



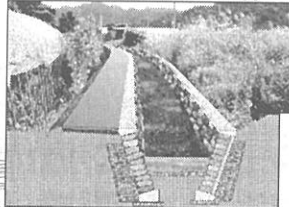
改修計画案の説明

## 改修計画～特に住民意向を反映させた箇所～

阿弥陀広場



空石積み水路



六地藏広場  
(親水水路)

案内板

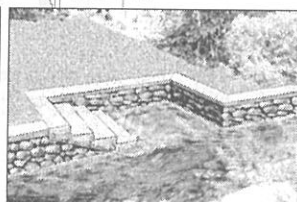
落差工

説明板

洗い場(縦型・横型)

全線管理道  
(旧平湯街道)

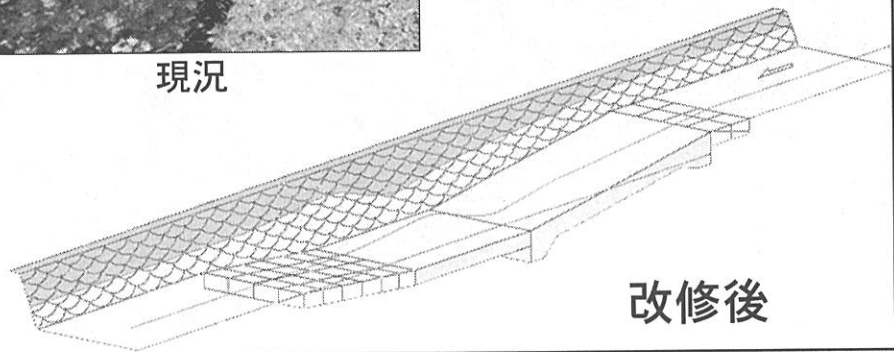
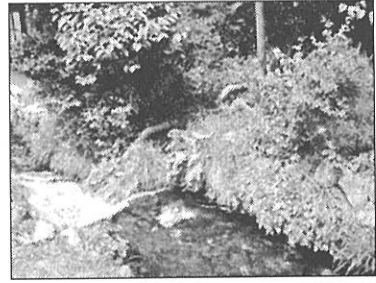
橋



## 改修計画～落差工～



現況



改修後

## まとめ

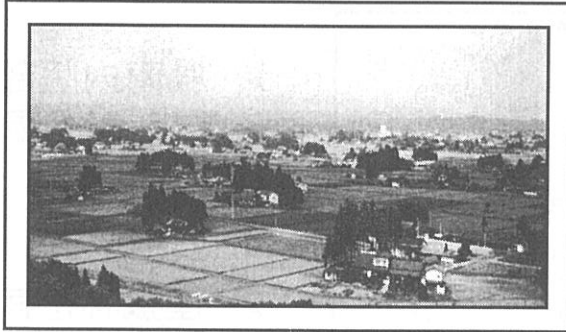
- ・調査段階からの住民参加
- ・若林用水路検討会の役割
- ・行政の柔軟な対応



今後の事業展開

計画と事業の調整

住民の認識・利用管理を考慮した屋敷林の分類及びその  
特性に関する研究  
～岩手県胆沢町の屋敷林を事例として～



茨城大学

○太田未来 小林久

背景・目的

- 二次的自然としての農村環境の重要性
- 保全の当事者である地域住民の認識への配慮の必要性



屋敷林に対する住民の認識を明らかにし、  
管理保全の当事者である住民の関わり方の  
重要性を考察

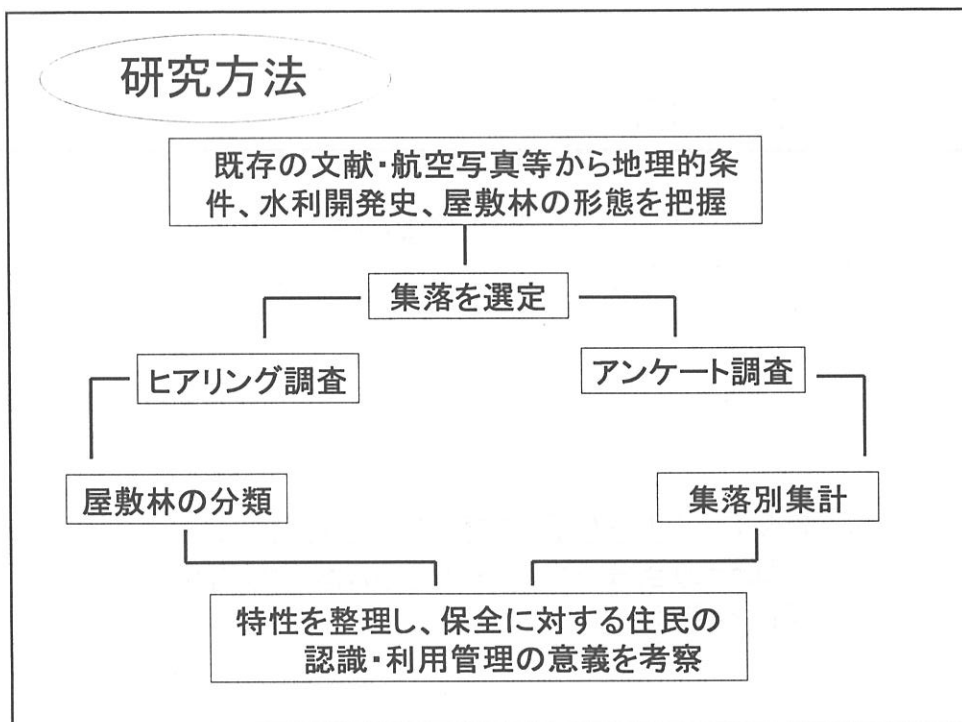
## 調査対象地

### 岩手県胆沢町



- 県南内陸部に位置し、胆沢扇状地上にのる
- 屋敷林を有する散居集落が全国的に有名

## 研究方法



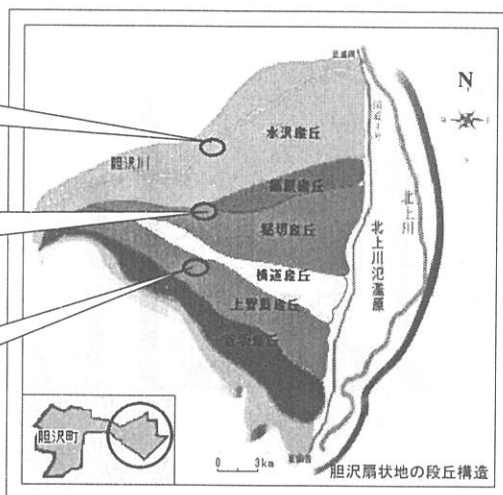


## 調査対象集落

水沢段丘: 低位段丘  
新里集落

堀切段丘: 中位段丘中位面  
大谷地集落

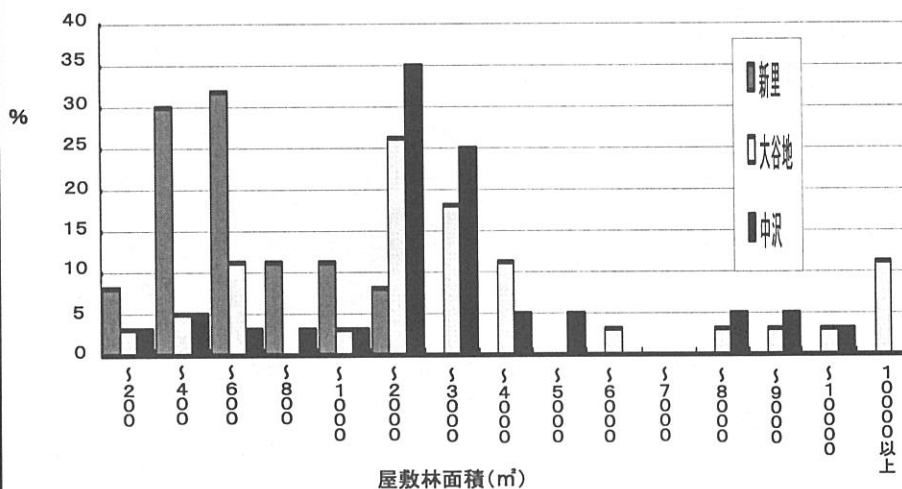
上野原段丘: 中位段丘上位面  
中沢集落



## 水利開発史と地理的条件

集落	標高	土壌	生産性	排水	水利開発
新里	180～50m	黒泥～灰色低地土	高	不良	1570～72年に茂井羅堰が開堰
大谷地	190～70m	黒ボク土(台地の土壌)	低	良	寿安堰が1618年に完成
中沢	220～80m	黒ボク土と褐色森林土	低	良	1951年から開拓が始まり1963年に開拓用水路が完成

## 屋敷林面積



## ヒアリング

➤ 期間 2002年8月22日～9月1日

➤ 対象 平均的な屋敷林面積の家と例外的な屋敷林面積の家を抽出

集落	10～20代	30～40代	50～60代	70～80代	合計()内は女性数
新里	3	1	6	5	15(9)
大谷地	0	3	6	1	10(4)
中沢	2	3	5	6	16(11)
合計	5	7	17	12	41(24)

(人)

## アンケート

- 実施期間 2002年11月下旬～12月中旬
- 対象 新里、大谷地、中沢の各集落全戸
- 対象者の抽出 一戸につき5枚の回答用紙を同封
- 配布・回収方法 とともに郵送

### 回収率

集落	配布数(戸)	回収数(戸)	回収率(%)
新里	50	22	44
大谷地	63	32(転居先不明1)	52
中沢	49	21	43
合計	162	75(転居先不明1)	46

## 回答者の内訳

集落	回答者数	無効回答	有効回答 ( )内は女性数	10～ 20代	30～ 40代	50～ 60代	70代 ～
新里	66	6	62(32)	12	14	28	8
大谷地	82	7	75(33)	9	25	26	15
中沢	71	6	65(30)	13	17	21	14
合計	219	19	202(95)	34	56	75	37

(人)

主要属性(性別、年齢など)に回答のなかったものは無効回答とした

## 数量化Ⅲ類に用いた項目(カテゴリー)

形態	屋敷林面積1000㎡未満
	1000㎡以上～2000㎡未満
	2000㎡以上
宅地との登記上の区別	実のなる木がある
	明神様(家の守神)がある
	墓がある
	キヅマ(美観・防風目的の薪を積んだ垣根)がある
	野生動物が来る
利用管理	手入れは全体
	手入れは部分的
	手入れはしない
	林内の活用(キノコ栽培など)
	薪または落ち葉の利用
認識	家の材料に使用
	認識している樹種は2種類以上
	認識している樹種は3種類以上
	認識している樹種は4種類以上
	屋敷林に愛着がある
配慮	手入れがされているきれいさへの配慮
	野生動物が来るのは迷惑
	防風林として必要
	邪魔なら切る
	屋敷林が無いのは寂しい
	落ち葉掃きは面倒

測定対象(サンプル)の回答

該当する →1

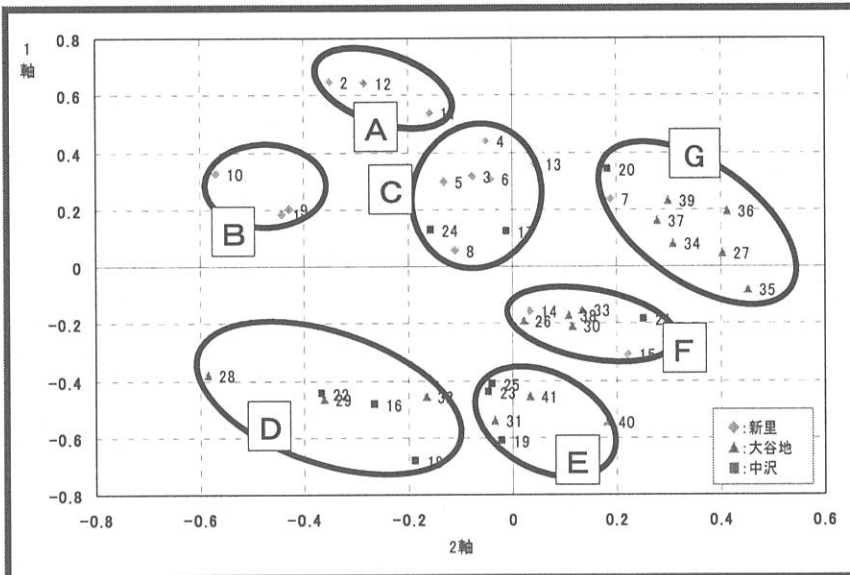
該当しない→0

## カテゴリースコア分析結果

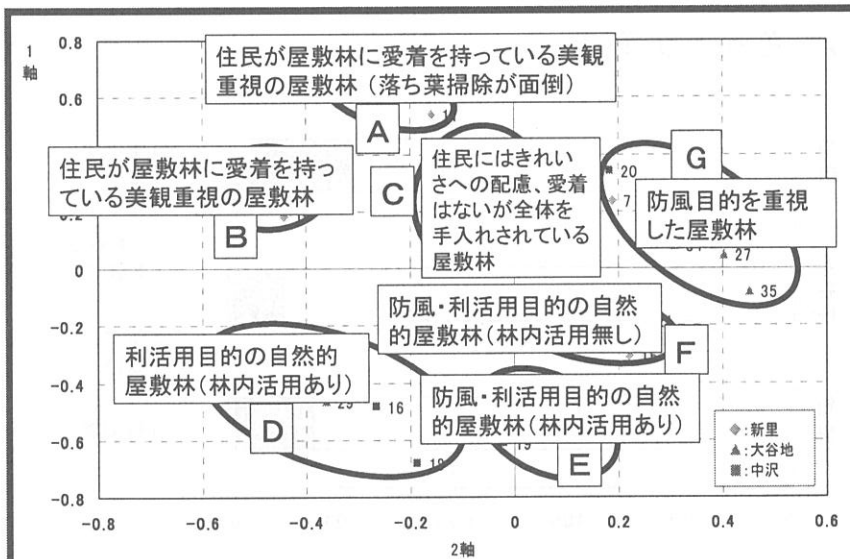
計算結果	固有値	寄与率	累積%	相関係数
1	0.1234	24.9%	24.9%	0.3513
2	0.0675	13.6%	38.5%	0.2598
3	0.0533	10.8%	49.3%	0.2309
4	0.0417	8.4%	57.7%	0.2042
5	0.0327	6.6%	64.3%	0.1809

サンプルがうまく分散した計算結果上位3つについて分析を行う

## サンプルスコアの点グラフ1

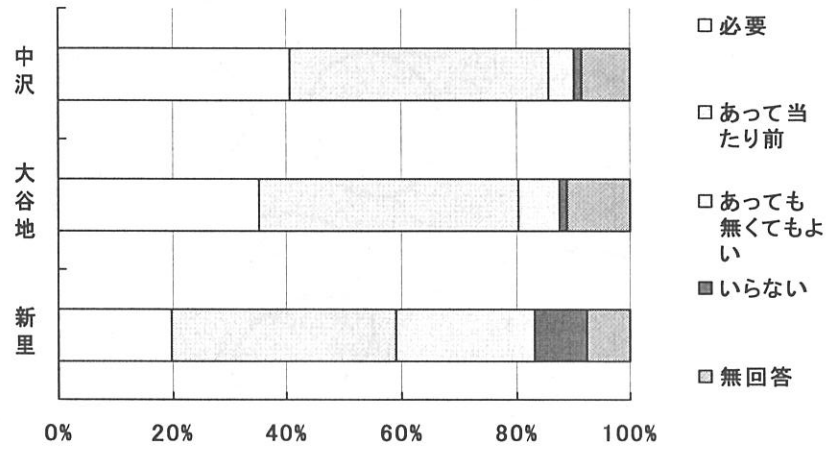


## グループの特性



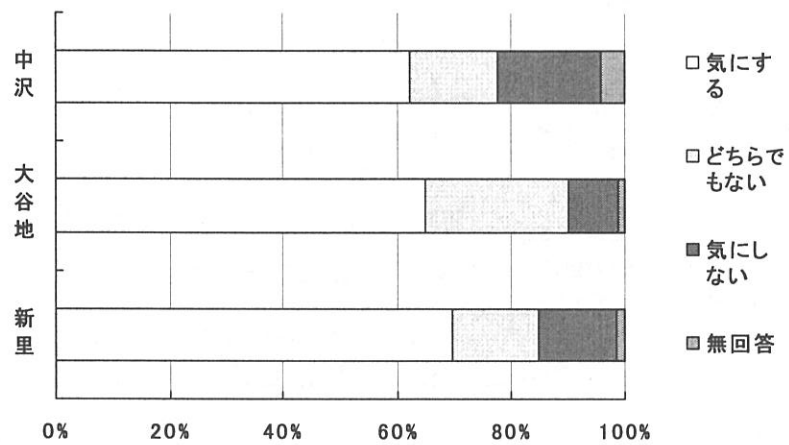
## 集落別集計結果1

### ➤ 屋敷林に対する認識



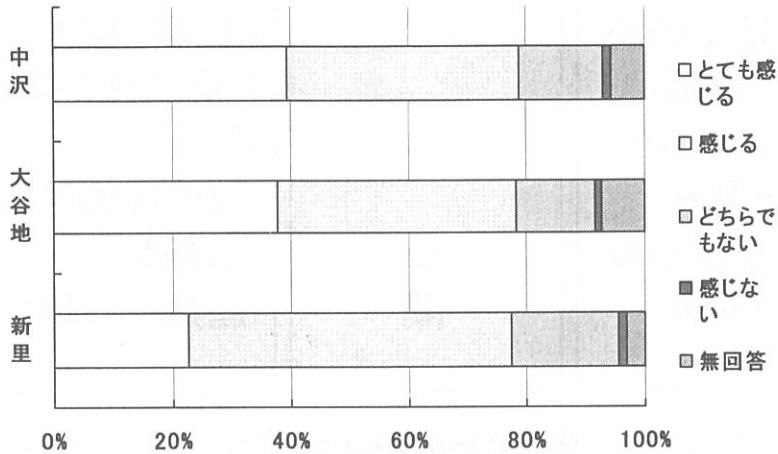
## 集落別集計結果2

### ➤ 美観への配慮



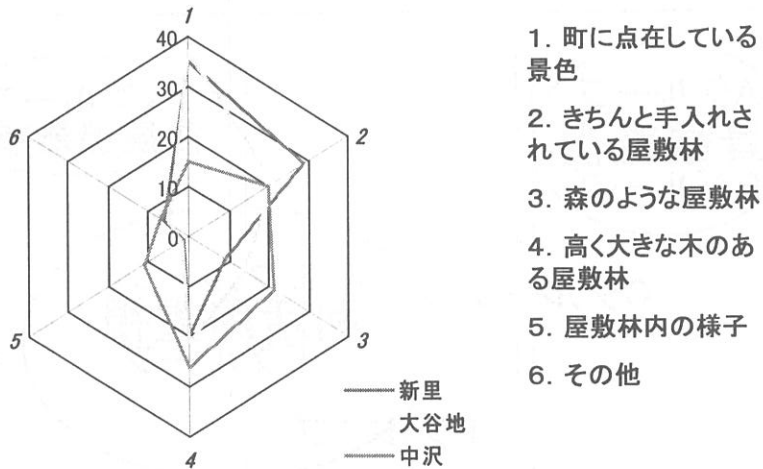
### 集落別集計結果3

#### ➤ 屋敷林に対する自然観



### 集落別集計結果4

#### ➤ 屋敷林の美しいところ







## まとめ

地域により屋敷林機能に対する認識が異なる



屋敷林保全においては、地域・住民により異なる認識に配慮した対策の検討が必要である

## 資料 平成15年度農村計画研修会—第25回農村計画研究部会現地研修集会—について

平成15年度農村計画研修会は農村計画学会の協賛を得て、平成15年9月9日に山形市で開催され、全国から284名が参加した。今回は「田園ルネッサンスをめざして—ふるさと空間の継承のために—」をテーマとして各2本の講演及び報告、同一テーマによるパネルディスカッションが行われた。また翌10日には現地検討会が催され、住民主体の地域づくりの山辺町作谷沢地区や朝日町のエコミュージアム、寒河江市の国営寒河江川下流地区等で現地研修を行い、223名が参加した。

以下、基調講演、講演及び報告の要旨とパネルディスカッションの概要について簡単に報告する。なお、講演要旨・資料は、本研究部会の部会誌『農村計画』№51に収められている<sup>1)</sup>。また、パネルディスカッションの詳細な記録は別途、報告する予定である。

### 1. 講演の要旨

最初に堀繁氏（東京大学アジア生物資源環境センター教授）が、豊富なスライドを用いながら「農村景観をデザインする」と題して講演を行った。まず「景観は好みではなく、論理に基づいて構成されている」との考えに基づき、景観をデザインする際に必要とされる原則を説いた。すなわち視点と視対象の関係が良い（適正な見込み角の確保、視軸線阻害の防止）こと、視対象の統合性（景観に占める一部分の評価がそれ以外の評価にも影響を与える）への配慮、意味論（自らその景観に入って楽しい、気持ち良いと思えるか）への配慮、そして名物主義の禁止である。またこうした基本原則がこれまでの農村整備に欠けていたことを指摘した。

次に、日本の農村の特徴及び農村ならではのデザインとは何かについて解説した。まず、日本の農村は水田を中心とすることから、水の流れにしたがって集落は低い所から水田→住居→山という構成を特徴とすること、また古くから山は水源としてのみならず人々に様々な恵みを与える神、あるいは豊かさの象徴として生活と一体であったことも特徴の1つと指摘した。同時に地域の象徴となる山を見る者にインパクトを与える道路設計が行われ

ている具体例を示し、農村が都市の規範となっている日本では近江八幡（滋賀）や龍野（兵庫）、江戸時代の富士山といった都市の事例からも古の人々の山への配慮が読み取れること、しかし自覚をしていなければこうした配慮は簡単に失われる危険性が高く、デザインが感動を与える場所が減りつつある傾向に警鐘を鳴らした。

3つ目の農村の特徴として、地形と土地利用が連動しかつ安定している点を挙げ、微高地を鎮守として神聖視する例が多く見られるように、特に微地形を上手に利用してきたのが日本の農村の文化であり伝統でもあることを指摘した。さらに、農村の個性である地形を活かすため日本では空間を認識できる工夫を樹木によって行っている事例を紹介した。例えば神を祀る場所や道、湖沼といった場所の重要性を示すために樹木が用いられ、時の推移とともにそれらが「遊行柳」等のようにシンボルとして定着している例は多い。しかし圃場整備や樹木の老齢化、名所としての強調に伴い、伐採や移植又は同じ樹木を近くに植えるケースが見られる。これは本来その樹木が植えられた意味から考えると「空間文化の維持」とは呼べない対処法であり、前述した日本固有の伝統を知り、デザインする上での基礎知識を持ちながらものを作ることが大切であることを重ねて強調した。

続いて石川敬義氏（荘銀総合研究所副理事長）から、山形県での農村に関する行政計画のコンセプトの推移やいくつかの活性化事例をもとに、今後行政計画に求められるものや、活性化を可能にするコミュニティのあるべき姿について講演があった。氏はこれまでの経験から、コミュニティと行政計画は切っても切れない関係にあると説くと同時に、近年、地方分権の推進だけでなく、多種多様な基本法の施行や行政評価システム導入等の国の政策変更が行われているが、これらの成否は活力を失ったコミュニティが自身の問題を解決できるか如何にかかっているとの考えを述べた。

ではコミュニティの変革には何が必要なのか。それには合意形成力、変化への対応力、協働力、コミットメント力、マネジメント力の5つの要素が挙げ、さらにコミ

ユニティは行政計画の実現を図るために、行政等と以下の4条件を備えたパートナーシップを形成することが重要と指摘した。すなわち行政と住民が対等であること、情報が共有されていること、目標に向けた住民の合意形成があること、そして課題解決に向けて各セクターが主体的にかかわること、である。

そして行政計画を遂行するためにマニフェスト等の新しい手法が導入されつつあるが、計画の内容も従来の総合型から地域をマネジメントできる戦略的なものへ変えるだけでなく、コミュニティを構成している人間を成長させる要素(動機付け・場の形成・課題解決力)を含むものでなければならぬと締め括った。

次に渡部氏(山形県)から県の農村整備の現状と、長期計画で「ゆとりとうるおい空間」に位置づけられている農村地域において「環境配慮」、「多面的機能」、「高齢化社会等」、「都市農村交流」、「住民参加」という5つの課題に取り組んでいる地区の事例紹介が行われた。特にその中から「多面的機能」に取り組む山形五堰の保全と活用について、「住民参加」に取り組む山辺町作谷沢地区の事例について、山形市役所担当者と住民代表から詳細な報告があった。山形五堰での取り組みでは小学校を活用した教育プログラムと一般市民向け活動の2種類があることや、今後は点から線、さらには面的な広がりを持った維持管理を目指していることが報告された。また、山辺町での取り組みでは地域づくりを人任せにせず、住民自らが責任を持つ意識で行っていることや、「地産地生(=ここで生まれてここで生きる)」の地域づくりを目指していることが報告された。

最後に石川善成氏(農水省農村振興局)からは来年度から始まる『水とみどりの「美の里」プラン21』の概要と平成15年度予算の重点項目について報告があった。「美の里」プランとは活力ある農林漁業が行われていることを前提に、景観的要素についてもケアできる取り組みであり、農水省では地域住民が主体的に取り組むむらづくり活動をサポートすることの重要性を認識しており、今後、国と地域との距離感を埋め、ネットワークを強化していきたい考えであることが示された。

## 2. パネルディスカッション

コーディネーターに前川勝朗氏(山形大学教授)を迎え、パネリストとして前出の堀繁氏、石川敬義氏に高橋龍一氏(寒河江川土地改良区理事)、岡部恵美子氏(NPO Do! tank代表)、高坂慶子氏(民宿「アエル」経営者)の3氏を加えて行われた。議論では本研修集会のキーワードである「ふるさと空間(=農村)」の現状とそのあるべき姿等について様々な意見がパネリストから出された。まず都会からの訪問者は何もない農村に良さを感じているが、よく見れば多くの生き物や景色、そして脈々と引き継がれてきた文化があり、それらが人材育成に貢献していたこと、しかしそれらの価値を継承できるか否かの岐路に今の農村は立っているとの認識が示された。

また今後ふるさと空間の継承を可能にするためには、農業や地域資源を生かした新しい産業(農家民宿、女性起業)の確立や、農業という職業と農村での生活に住民が誇りを持てる施策が必要であること、また農業法人や環境保全を目的とするNPO活動、パートナーシップに基づくグラウンドワーク等の個々の取り組みを支援できる仕組みやネットワーク作りが求められているとの指摘が出された。さらに山形県でのグラウンドワークには土地改良区の長年の努力があったように、息の長い取り組みが必要であること、そのためのコミュニティの重要性、生活空間としてだけでなく景観にも配慮できるプロの育成の必要性等が挙げられた。

本研修集会の開催にあたっては、山形県や水士里ネットやまがたをはじめ関係各位に多大なるご尽力、ご支援を頂いた。最後になるがこの場を借りてお礼を申し上げます。

### 参考資料

- 1) 農業土木学会農村計画研究部会：農村計画第51号、ISSN 0914-8671, pp.1-70 (2003)  
(文責：京都大学大学院農学研究科・九鬼康彰)

## 事務局通信

昨年、山形市で開催された第25回現地研修集会「田園ルネッサンスをめざして～ふるさと空間の継承のために～」は、284名の参加者を得て実り多い集会となりました。これもひとえに山形県、水土里ネットやまがた、農村計画学会、東北農政局や関係市町村等のご尽力の賜と感謝申し上げます。本年は、ご多忙な中を岐阜県に開催をお引き受けいただきました。昨年と同様、実り多い研修会になると思います。

また当部会では、農業土木学会大会の企画セッションとして討論集会を開催しています。これは、現場と研究を結ぶざっくばらんな討論の場として毎年企画している集会です。昨年は沖縄県那覇市で、松本康夫氏（岐阜大学）のコーディネートによって「条件不利地域の振興を考える」というテーマで行われました。話題提供いただいたのは、仲地宗俊氏（琉球大学農学部）、岡村純氏（沖

縄県立看護大学）で、離島地域という条件不利地域を対象に、その具体的課題を整理しました。本年度は、「畜産酪農資源をめぐる循環型農村地域形成の展望」というテーマで、北海学園大学（札幌市）で開催されます。畜産酪農資源の適正管理による負荷軽減と有効活用の実態・課題をとおして、循環型農村地域の将来像を展望する予定です。

さらに、当部会では部会独自に奨励賞を授与しております。この賞は、農業土木学会大会講演会の報告者の中から「農村計画学の新たな発展に寄与することが期待される研究発表を行った若手研究者」に授与されます。本年で4回目となりますが、既に6名の方が受賞されています。受賞者のプレゼンテーション資料を本誌で順次紹介していきますので、ご期待ください。

### 平成15年度農村計画研究部会活動報告

#### 1. 平成15年度活動報告

##### ① 25回現地研修集会

テ ー マ：「田園ルネッサンスをめざして」  
～ふるさと空間の継承のために～

日 時：平成15年9月9～10日

場 所：山形テルサ（山形県山形市）

講 師：6名 パネラー等：6名

担当幹事：前川勝朗

参加者：284名（現地検討会参加者：223名）

##### ② 討論集会

テ ー マ：「条件不利地域の振興を考える」

日 時：平成15年7月10日

場 所：沖縄県那覇市

担当幹事：山路永司

コーディネータ：松本康夫

講 師：4名

参加者：52名

##### ③ 部会誌「農村計画」の発行

第32巻1号（通巻51号）平成15年8月発行

##### ④ 常任幹事会 3回：5/1, 11/7, H16.3/19

#### 2. 平成15年度収支決算

一般会計

(収入)

繰越金 248,605円

交付金 100,000円

協賛金 100,000円

研修集会運営費 200,000円

雑収入 20,006円

計 668,611円

(支出)

会議費 84,495円

事務費 279,848円

通信費 72,780円

繰越金 231,488円

計 668,611円

特別会計 農業土木学会農村計画研究部会奨励基金

(収入)	
基金積立額	648,959円
計	648,959円
(支出)	
事務費	55,045円
通信費	0円
基金積立額	593,914円
計	648,959円

部会誌編集	九鬼 康彰	京都大学大学院農学研究科教授
研修集会担当	松本 康夫	岐阜大学応用生物科学部教授
討論集会担当	○山路 永司	東京大学大学院新領域創成科学研究科教授

3. 平成16年度事業計画

① 第26回現地研修集会

テーマ：みんなで描く山里ものがたり  
 ー古きをたずね、人と地域資源でつむぐー

日時：平成16年8月26～27日  
 場所：飛騨・世界生活文化センター芸術堂（岐阜県高山市）

担当幹事：松本康夫

② 討論集会

テーマ：畜産酪農資源をめぐる循環型農村地域形成の展望

日時：平成16年9月9日  
 場所：北海学園大学（北海道札幌市）

担当幹事：山路永司

オーガナイザ：長澤徹明

コーディネータ：野本健

③ 部会誌「農村計画」の発行

第33巻1号（通巻52号）平成16年8月発行

④ 常任幹事会 3回

4. 役員体制（平成16年6月現在）

1. 役員

部会長	○有田 博之	新潟大学農学部生産環境科学科教授
副部会長	○亀田 昌彦	(株)三祐コンサルタンツ取締役
副部会長	○松尾 芳雄	愛媛大学農学部教授
監事	松村 洋夫	(財)農村開発企画委員会常務理事
部会誌担当	○高橋 強	京都大学大学院農

2. 幹事

北海道（50音順）

小黒 卓男	(株)ドーコン 農業部主幹
中山 熙之	北海道農業研究センター総合研究部室長
○長澤 徹明	北海道大学大学院農学研究科教授
野本 健	(財)北海道農業近代化技術研究センター
山上 重吉	専修大学北海道短期大学教授

東北

神宮字 寛	秋田県立大学短期大学部講師
高橋 博	(株)新東洋技術コンサルタント常務取締役技術本部長
谷口 建	弘前大学農学生命科学部教授
田村 孝浩	宮城県農業短期大学講師
服部 俊宏	北里大学獣医畜産学部講師
○広田 純一	岩手大学農学部教授
○前川 勝朗	山形大学農学部生物環境学科教授

関東

安藤 嘉章	太陽コンサルタンツ(株)環境資源事業部部長
石川 雅也	東京大学大学院農学生命科学研究科助手
石田 憲治	農業工学研究所農村環境部室長
○井原 和彦	(社)農村環境整備センター統括研究員兼研究第2部長
上杉 静夫	(株)日本農業土木コンサルタンツ技師長
○太田 勝也	全国土地改良事業団体連合会企画研究部長
○落合 基継	(財)農村開発企画委員会研究員
○工藤 清光	農業工学研究所農村計画部部長
○河野 英一	日本大学生物資源科学部教授

- 駒村 正治 東京農業大学地域環境科学部教授
- 佐久間泰一 筑波大学農林工学系講師
- 下舞 寿郎 (社)日本農業集落排水協会水質研究部部長
- 千賀裕太郎 東京農工大学農学部教授
- 富田 正彦 宇都宮大学農学部教授
- 中西 信彦 (社)地域社会計画センター主任研究員
- 姫野 靖彦 内外エンジニアリング(株)東京支社技術部次長
- 藤沢 和 明治大学農学部教授
- 牧山 正男 茨城大学農学部助手
- 宮崎 雅夫 農村振興局農村政策課課長補佐
- 安田 憲司 農村振興局事業計画課課長補佐
- 山田 和広 農村振興局農村整備課課長補佐
- 豊 輝久 (財)日本農業土木総合研究所主任研究員

中部

- 足立一日出 北陸研究センター北陸水田利用部室長
- 荒井 涼 富山県立大学短期大学部助教授
- 木村 和弘 信州大学農学部教授
- 木本 凱夫 三重大学生物資源学部助教授
- 小池 聡 名城大学都市情報学部教授
- 笹野 伸治 名城大学農学部非常勤講師
- 藤居 良夫 信州大学工学部社会開発工学科助教授
- 藪内 克義 (株)協和代表取締役社長
- 吉永 次男 (株)葵エンジニアリング社長

近畿

- 荻野 芳彦 大阪府立大学大学院教授
- 海田 能宏 京都大学東南アジア研究センター教授
- 梶 雅弘 北居設計(株)企画部次長
- 金木 亮一 滋賀県立大学環境科学部助教授
- 鳥崎 清寿 サンスイコンサルタント(株)部長
- 八丁 信正 近畿大学農学部教授
- 星野 敏 神戸大学農学部食料生産環境工学科助教授
- 村上 嗣雄 日本技研(株)管理部部長

中四国

- 井上 久義 近畿中国四国農業研究センター室長
- 大西 博 (株)チェリーコンサルタント環境部技術監
- 紙井 泰典 高知大学農学部助教授
- 喜多威知郎 島根大学生物資源科学部教授
- 西山 壮一 山口大学農学部教授
- 前川 俊清 広島県立大学生物資源学部助教授
- 三浦 健志 岡山大学環境理工学部教授
- 森下 一男 香川大学工学部助教授
- 吉田 勲 鳥取大学農学部教授

九州・沖縄

- 秋吉 康弘 宮崎大学農学部教授
- 大坪 政美 九州大学大学院教授
- 加藤 治 佐賀大学農学部教授
- 宜保 清一 琉球大学農学部教授
- 橋口 哲郎 アジアプランニング(株)取締役
- 原口 暢朗 九州沖縄農業研究センター環境資源研究部室長
- 平 瑞樹 鹿児島大学農学部助手

3. 顧問 (50音順)

- 石光 研二
- 今井 敏行
- 梅田 安治
- 北村貞太郎
- 小出 進
- 高須 俊行
- 中川昭一郎
- 長崎 明
- 安富 六郎
- 山本 敏

4. 事務局

- 事務局長 福与 徳文 農業工学研究所農村計画部室長
- 事務局員 八木 洋憲 農業工学研究所農村計画部研究員
- 事務局員 芦田 敏文 農業工学研究所農村計画部研究員

# 刊 行 物 案 内

農業土木学会農村計画研究部会誌「農村計画」のバックナンバーは別表のとおりです。ご入用の方は下記申込要領により、部会事務局までお申込下さい。なおバックナンバーの目次をご希望の方は、目次のコピーサービス（既刊全号）を併せてご利用下さい。

## 記

1. バックナンバーの価格 1冊 2,000円（送料事務局負担）
2. 申込方法 購入を希望される巻号（通巻号）冊数、  
送本先連絡電話番号を明記し、官製ハガキでお申込下さい。

3. 申込先 〒305-8609  
茨城県つくば市観音台2-1-6  
農業工学研究所 農村計画部  
地域計画研究室内  
農村計画研究部会事務局あて  
(TEL029-838-7548・7549)

4. 送金方法 送本時に詳細を同封します。  
見積書、納品書、請求書は添付しますが、  
所定の用紙が必要な場合はその旨ご連絡下さい。
5. 目次のコピー 郵便料とコピー代金の実費（既刊全号セット400円）で頒布します。目次  
コピー入用の方は80円切手5枚同封し、  
送付先を明記の上、封書で部会誌と同じ  
申込先へお申込下さい。

## 部会誌各号の特集・テーマ

通巻号	特 集 内 容	発行年月	通巻号	特 集 内 容	発行年月
1*	第1回研究集会	1972.5	27/28	合併号 部会設立10周年	1982.3
2*	投 稿	1973.4	29	農村計画と集落排水	1982.7
3*	第3回研究集会	1973.4	30	水質保全と集落排水	1983.7
4*	第5回研究集会	1974.6	31	土地改良の新しい展開を求めて	1984.7
5*	投 稿	1974.7	32	農村整備の新しい方向	1985.8
6	投 稿	1975.6	33	新しい時代の農村計画	1986.7
7*	第8回研究集会	1975.12	34	魅力ある農村空間の創造	1987.7
8	投 稿	1976.6	35*	ゆとりとやすらぎのある農村計画を求めて	1988.7
9*	第6回研究集会	1977.3	36*	農村地域の活性化をめざして	1989.7
10	第9回研究集会	1977.3	37	中山間地の開発と村おこし	1990.8
11*	第10回研究集会	1977.3	38*	都市・農村における快適な農空間の創造	1991.8
12*	投 稿	1977.3	39*	文化と歴史の調和したむらづくり	1992.8
13	第11回研究集会	1978.3	40	農村アメニティの構築にむけて	1993.8
14	第12回研究集会	1978.3	41	2050年に向けた地域ビジョンの確立	1994.8
15	過疎地域における農山村開発	1979.1	42	農村環境の管理を考える	1995.8
16	投 稿	1979.3	43	次世代に向けて農村整備はなにをすべきか	1996.8
17	投 稿	1979.8	44	住みよく豊かな「むら」づくり	1997.8
18	定住構想と農村計画	1980.3	45	農村地域における総合計画の新たな展開	1998.9
19	農村定住条件と村づくり	1980.3	46	新農業基本法と農村の地域づくり	1999.9
20	土地分級と土地利用計画	1980.3	47	農村地域における水辺環境を考える	2000.9
21	投 稿	1980.7	48	21世紀の農村振興を考える	2001.9
22/23	合併号 農村計画と土地利用計画	1981.1	49	農村計画研究部会設立30周年記念号	2002.3
24	80年代の村づくりへの展望	1981.3	50	元気の出る田園空間の創造	2002.8
25	農村計画における土地利用調整	1981.10	51	田園ルネッサンスをめざして	2003.8
26	明るい村づくりの新軌道	1981.12	52	みんなで描く山里ものがたり	2004.8

\*印は絶版のため、コピー製本版にて頒布

## 編集後記

海外出張中の編集担当役員のピンチヒッターとして、今回の部会誌制作をお手伝いしました。歴史ある山国文化の里として、美濃・飛驒の風土は実に美しく、将来にわたって守るべき資産として世に伝えられます。一方で、そこに住む人々の営みを重ね合わせたときに浮かび上がる課題の数々や、それらを解決するための道筋は、地域によってさまざまであり、地域の中にこそその答えがあることが、講演や事例報告を通じて描き出されました。

地域にとっての答えをもたらすのは、優れた技術をもつプランナーや研究者による問題の分析や解決策の提示だけでも、また行政による効率のよい事業実施だけでもありません。地域の人々を中心に据えたこれら多様な主体の関わりのなかで、地域の現状を見つめ、将来像を描き、その実現のための手段を編み出す。その過程こそが「人と地域資源をつむぐ」作業であり、住民自らが地域のさまざまな「豊かさ」を見出すための、新たな価値尺度の創出が求められる場面ではないでしょうか。晩夏の飛驒が、皆さまそれぞれにとってのこうした価値発見の機会となることを願っております。最後になりましたが、ご多用のなかご講演の準備にご尽力いただいた講師の皆さま方に心より御礼申し上げます。

(K.M.)



# 農業土木学会農村計画研究部会規約

(平成 8 年10月20日改正)

## 名 称

1. この部会は、農村計画研究部会と称する。

## 目 的

2. この部会は、農村計画、農村整備に関する学術の発展及び部会員間の学術交流に寄与することを目的とする。

## 事 業

3. この部会は、その目的を達成するため、共同研究・研究会等の開催・研究資料の収集・配布、関連諸機関との学術交流等を行う。

## 所属・会員

4. この部会は、農業土木学会に所属し、その学会員を主な構成員とするが、非学会員の加入も妨げない。

## 役 員

5. この部会には部会長 1 人、副部会長 2 人、常任幹事、幹事若干名及び監事 1 人の役員をおく。

## 総 会

6. 総会は、原則として年 1 回開催し、部会の重要事項について審議する。

## 役員会等

7. 事業の円滑な運営を図るため、部会には常任幹事会及び必要に応じて各種委員会を設ける。

## 経 費

8. この部会の運営に要する経費は、農業土木学会の補助金、会員の負担、寄付金等によってまかなう。

## 入 退 会

9. この部会への入退会は自由であるが、そのつど事務局へ連絡する。

## 事 務 局

10. この部会の事務局は、茨城県つくば市観音台 2 - 1 - 6 独立行政法人農業工学研究所農村計画部地域計画研究室におく。

2004年8月20日 印刷  
2004年8月26日 発行

編 集 農業土木学会農村計画研究部会  
〒606-8502 京都市左京区北白川追分町  
京都大学大学院農学研究科  
地域環境科学専攻地域環境管理工学講座農村計画学分野内  
TEL 075-753-6159

発 行 農業土木学会農村計画研究部会事務局  
〒305-8609 茨城県つくば市観音台 2 - 1 - 6  
独立行政法人農業工学研究所  
農村計画部 地域計画研究室内  
TEL 029-838-7549  
銀行口座番号 普通 6210117  
常陽銀行 谷田部支店  
口座名称 農村計画研究部会事務局

制 作 財団法人 農林統計協会  
〒153-0064 東京都目黒区下目黒 3 - 9 - 13  
目黒・炭やビル  
TEL 03-3492-2950(編集部)

JOURNAL OF **RURAL PLANNING**

Vol.33-I No.52



2004. 8

THE SOCIETY OF RURAL PLANNING

Independent Administrative Institution

National Institute For Rural Engineering

Department of Rural Planning, Laboratory of Regional Planning

2-1-6 Kannondai, Tsukuba, Ibaraki, 305-8609 JAPAN